

大阪市中心区

難波 1 丁目所在遺跡 B 地点

発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所



調査区全景(東から)

大阪市中央区

難波 1 丁目所在遺跡 B 地点 発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

序 文

難波1丁目所在遺跡は、御堂筋と千日前通りの交差点付近という、大阪随一の繁華街で発見された埋蔵文化財包蔵地である。

当地は、江戸時代初期には大坂七墓の一つ、千日墓所に近接する地であったが、18世紀初頭の難波新地の開地以降は市街化が進み、幕末からは繁華街として栄えた地である。明治33(1900)年に精華尋常小学校の校地になってからは、平成に至るまで学びの庭として時間が経過した。遺構・遺物など発掘成果には、難波新地の造営以降、とりわけ19世紀初頭～幕末を中心に見るべきものがある。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大なご協力を賜った大阪市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より御礼申し上げる。

2012年3月

財団法人大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所長 長山 雅一

例 言

- 一、本書は、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所が、2010年度に大阪市中央区難波三丁目25番において実施した難波1丁目所在遺跡B地点発掘調査(NB10-2次)の報告書である。
- 一、発掘調査と遺物整理、および報告書作成に係る費用は大阪市教育委員会が負担した。
- 一、発掘調査は財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 次長兼調査課長 南秀雄の指揮のもと、同主任学芸員 黒田 慶一が行った。調査の面積・期間などは第Ⅱ章に示した。本書の編集は南および難波宮調査事務所長 高橋 工の指揮のもとで、黒田および同研究所学芸員 小田木富慈美が行った。第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ章および第Ⅲ章第1節は黒田が執筆した。第Ⅲ章第2節については遺構および瓦類についての記載を黒田が行い、陶磁器その他についての記載を小田木が行った。第Ⅳ章の瓦についての検討は黒田が、貝類についての検討を大阪歴史博物館学芸員 池田 研が行った。
- 一、本書の用字・用語や体裁などの調整は、黒田と高橋のほか、同研究所 東淀川調査事務所長 佐藤 隆・同学芸員 小倉 徹也からなる校正委員が行った。
- 一、遺構写真は黒田が撮影し、遺物写真の撮影は、主に楠華堂 内田真紀子氏に、一部を寿福写房 寿福滋氏に委託し、一部を黒田が撮影した。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて大阪文化財研究所が保管している。

凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学などの用語の中で、遺跡の地層に係る特殊な用語、並びに層相断面図の表現方法については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。
2. 本書における遺構名の表記には、溝はSD、井戸はSE、土壙はSK、小穴はSP、その他のものはSXを冠している。遺構番号は遺構の種別に関係のない通し番号とし、第7層上面検出遺構は200番台、第6a・6b層上面検出遺構は100番台、第5層上層検出遺構を2桁で示した。
3. 出土遺物には1からの通し番号を付している。
4. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+○m」と省略した。また、本報告書で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。図中の方位は図1が真北を基準に、それ以外は座標北を基準にしている。
5. 本書で用いた地層の土色は『標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。
6. 軒瓦の呼称は次のとおりである。
 - ・三巴文の卷きは巴頭から尾の方向で示した。
 - ・軒棧瓦の軒丸部のないものを「鎌唐草」とした。軒棧瓦・鎌唐草の文様は軒平部の文様で呼称した。
 - ・軒平部の文様区の厚さが左右対称でない場合、軒棧瓦か鎌唐草と考えた。左軒棧瓦・左鎌唐草(大棟から見た棧位置からの呼称である)の存在の可能性は排除し、軒平部左半のみが遺存するものは、軒平瓦とした。
7. 引用文献は巻末に示した。引用文献は本文中に[筆者または編集発行者 発行年]のかたちで表示するので巻末で検索されたい。また、本文中で引用文献を表記する際、大阪文化財研究所→大文研、大阪市文化財協会→大文協、大阪市教育局委員会→大市教と省略した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 既往の調査と遺跡の立地	1
1) 既往の調査	1
2) 遺跡の立地と周辺の歴史	2
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	7
1) 調査に至る経緯	7
2) 調査の経過	7
第Ⅲ章 調査の結果	9
第1節 層序	9
第2節 遺構と遺物	11
1) 江戸時代後半(第7層上面)の遺構と遺物	11
i) 穴蔵	ii) 土塋
iii) 小穴	
2) 江戸時代末(第6a・6b層上面)の遺構と遺物	15
i) 土塋	ii) その他の遺構および包含層出土遺物
3) 近代(第5層上面)の遺構と遺物	30
i) 水琴窟	ii) 井戸
iii) 土塋	
第Ⅳ章 遺構と遺物の検討	33
1) 瓦類の検討	33
i) 刻印瓦	ii) 軒平部の文様
iii) 軒瓦の種類	
2) 難波1丁目所在遺跡B地点(NB10-2次)調査出土の貝類	36
i) 資料の概要	ii) 貝類が出土した主要な遺構
iii) 貝種構成の特徴と貝製品	

第Ⅴ章　まとめ	39
---------	----

引用・参考文献	40
---------	----

英文目次

報告書抄録

図 版 目 次

1	地層断面	5	近代の遺構および出土遺物(1)
	上：北壁地層断面東半部(南から)		上：第5層上面検出遺構東半部(北から)
	下：西壁地層断面(東から)		下：SX01検出状況および出土遺物
2	江戸時代の遺構(1)	6	近代の遺構および出土遺物(2)
	上：第7層上面検出遺構全景(東から)		上：SX02検出状況および断面(北から)
	下：第7層上面検出遺構東半部(北から)		下：SX02出土遺物
3	江戸時代の遺構(2)	7	近代の遺構
	上：第7層上面検出遺構西半部(北から)		上：精華尋常小学校校舎の基礎西半部
	下：SX201(北から)		(北東から)
4	江戸時代～近代の遺構		下：精華尋常小学校校舎の基礎西半部(南から)
	上：第6a・6b層上面検出遺構全景(東から)	8	出土遺物(1)
	下：SK05(北東から)	9	出土遺物(2)
		10	出土遺物(3)

挿 図 目 次

図1	難波1丁目所在遺跡B地点の位置	図17	第6a・6b層上面遺構断面図
図2	周辺の遺跡	図18	SK105出土遺物実測図
図3	調査地位置図	図19	SK123出土遺物実測図(1)
図4	1791(寛政3)年の難波新地付近図	図20	SK123出土遺物実測図(2)
図5	幕末の難波新地付近図	図21	SK123出土遺物実測図(3)
図6	千日墓所と調査地の関係図	図22	SK125出土遺物実測図(1)
図7	調査区配置図	図23	SK125出土遺物実測図(2)
図8	地層と遺構の関係図	図24	SK127出土遺物実測図
図9	地層断面図	図25	第6a・6b層上面遺構出土遺物実測図
図10	第7層上面遺構平面図	図26	第6a・6b層上面遺構出土瓦類
図11	SX201平面・断面図	図27	第5層上面遺構平面図
図12	第7層上面遺構断面図	図28	SX01・02断面図
図13	SX201出土遺物実測図	図29	第5層上面遺構出土遺物実測図
図14	第7層上面遺構出土遺物実測図	図30	第5層上面遺構出土瓦類
図15	第7層上面遺構出土瓦類	図31	瓦の刻印拓影
図16	第6a・6b層上面遺構平面図	図32	軒平部の橘文様分類

表 目 次

表 1	軒瓦一覽表	34
表 2	出土貝類種名一覽	36
表 3	出土貝類一覽表	37

第Ⅰ章 既往の調査と遺跡の立地

1) 既往の調査

難波1丁目所在遺跡は、御堂筋と千日前通の交差点付近を中心とする一帯に所在する、古墳時代中期～室町時代の埋蔵文化財包蔵地である(図1～3)。NA05-1次調査[大市教・大文協2006]では、奈良時代の遺物包含層と鎌倉時代の建物ないし柵の跡が、NB09-1次[大文協2009a]では、鎌倉～室町時代の畠作地が見つかった(図3)。特にNA05-1次では奈良時代の遺物包含層が、東ほど泥炭質が強く西で弱くなることから、同層は沿岸州と上町台地に挟まれた沿岸トラフに堆積した沼沢地性層と推定された。その状況は中央区島之内の住友長堀銅吹所跡の下層で見られた地層の様子[大文協1998]に酷似しており、古代から中世に至る当地域は、沿岸ト

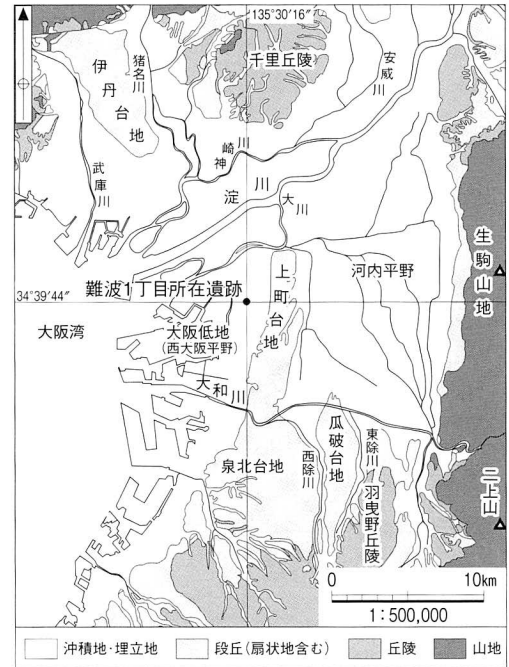


図1 難波1丁目所在遺跡B地点の位置



図2 周辺の遺跡

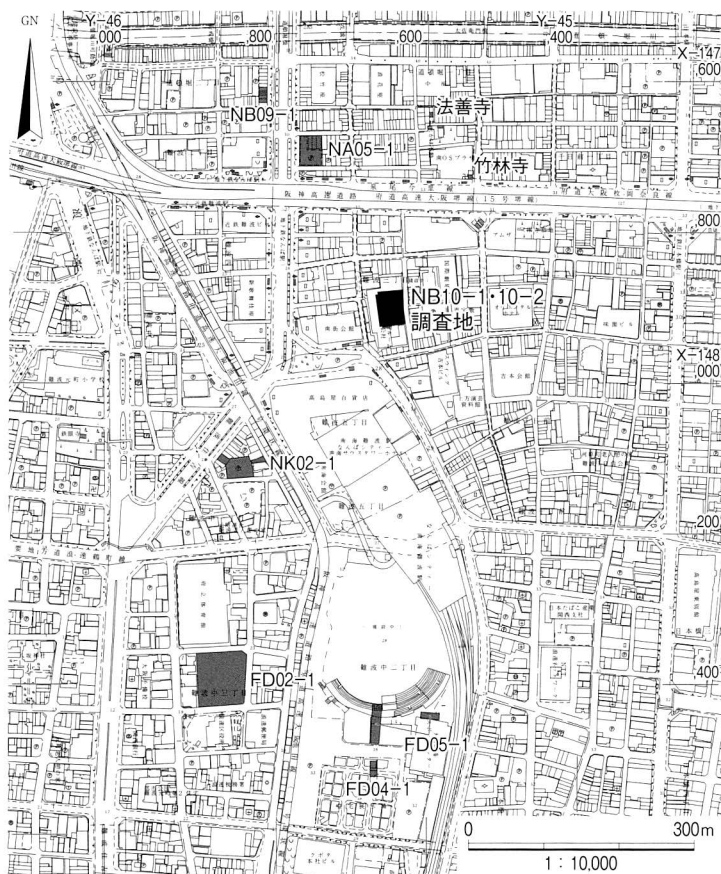


図3 調査地位置図

B地点と名付けられた(図2・3)。

当地周辺ではまた、南西300mの浪速元町遺跡(NK02-1次)[大文協2003a]、南南西～南600mの船出遺跡(FD02-1・04-1・05-1次)で調査が行われ[大文協2003b・2004・2005]、古墳時代の遺物包含層(FD04-1次)、中世の作土層(FD02-1・05-1次)、「難波御蔵」との関連が推測される18世紀の礎石建物(FD05-1次)が検出されている(図3)。

2)遺跡の立地と周辺の歴史

当地は江戸時代、難波村と呼ばれる大坂三郷に南接する大村で、南は颯川を挟んで木津村・今宮村、西は木津川に接していた。1700(元禄13)年までは下難波村と呼ばれ、大坂三郷の発展拡張に伴って村域は順次市街地化していった。1728(享保13)年には難波鑄銭所が置かれ、1733(同18)年には道頓堀川大黒橋下から難波入堀川(九郎右衛門町新川)を掘った上で、今宮村境に幕府の米蔵難波御蔵が建造された。難波御蔵は敷地東西70間・南北180間で、中に8棟の米蔵が建てられた。内閣文庫蔵の『難波御蔵絵図』では御蔵17棟があり、1棟3間と20間に及ぶ蔵もあった。当蔵は玉造御蔵とともに大坂城城米を納め、1791(寛政3)年には天王寺御蔵が廃止され、難波御蔵と一体化した。明治以後も存続したが、1904(明治37)年煙草専売局大阪工場が建設され、姿を消した[平凡社地方資料センター1986]。

当調査地が大阪市立精華小学校の校庭に位置するので、同校の沿革に触れておきたい。1872(明治5)年8月の学制発布に拠り、大阪府管内第1中学区第2大区第9小区第14番小学区が制定されたことを

ラフに水棲植物が繁茂する湿地が広がっていたと考えられた。同層から出土した奈良時代の土師器小型埴には、墨で絵が描かれており、人面墨画土器の可能性が高く、水辺の祭祀が行われ、周辺に奈良時代の集落の存在が推測された。また13世紀初めの『石清水文書』から、「三津寺荘」と呼ばれる石清水八幡宮の荘園[伊藤毅1987]が知られ、当遺跡北方に存在したと推定されている。

御堂筋から東へ130m、千日前通から南へ130mの、もと大阪市立精華小学校の校庭で、埋蔵文化財の包蔵状況を把握するために試掘調査(NB10-1次)[大文研2010]を行ったところ、江戸時代の遺構・遺物が多数検出され、難波1丁目所在遺跡

うけ、翌年、西坂町20番地にある法祐寺本堂において、第2大区第14番坂町小学校として開校した。

1877(同10)年、難波新地4番丁28番地の新校舎に移転後、1900(同33)年、難波新地5番丁の現在の校地に新築、移転するとともに、大阪市立精華尋常小学校と改称し、付属の幼稚園も精華幼稚園と改めて同地に併設された。1930(昭和5)年、鉄筋コンクリート4階建の現校舎が落成し、1995(平成7)年3月に閉校するまで使用された[大阪市立精華小学校1995]。

江戸時代以降の当地を考えるにおいて欠かすことのできないのは、幕末の見世物場と千日墓所である。まず見世物場の変遷から見ていきたい。目印になるのは「溝の側(みぞのかわ)」という堀川である。溝の側の位置は調査地の北50mにある東西通り、難波本通(現、難波センター街)で、西で九郎右衛門町新川に水を落としている。図4として挙げた1791(寛政3)年の難波新地付近図では、調査地は溝の側の南側に位置し、この付近に見世物場は見られない[田中豊・藤田実1992]。なお、難波新地付近では1858(安政5)年2月と1868(慶応4)年正月に大きな火災があり、これを報じた刷り物が存在する。それに拠ると1858年の大火は溝の側の北方で延焼は止まっているが、1868年の大火は溝の側以南の大火である。『近來年代記』[大阪市史編纂所1980]はこの火災を「なんば新地みそのかハよりとかく戎橋通両かハ南のはし迄焼」と記す。

幕末の難波新地付近は図5のようであった。これによると調査地の西側に見世物場が存在し、調査地の南側には「登加久」の文字が見える。また、[田中・藤田1992]によれば、「登加久」とは前掲文献に傍点を施した「とかく」に等しく、この頃調査地付近に存在したとみられる著名な料理屋の名である。

明治時代の難波新地の見世物場については、高橋好劇「溝の側の見世物」[高橋1925]がある。同文

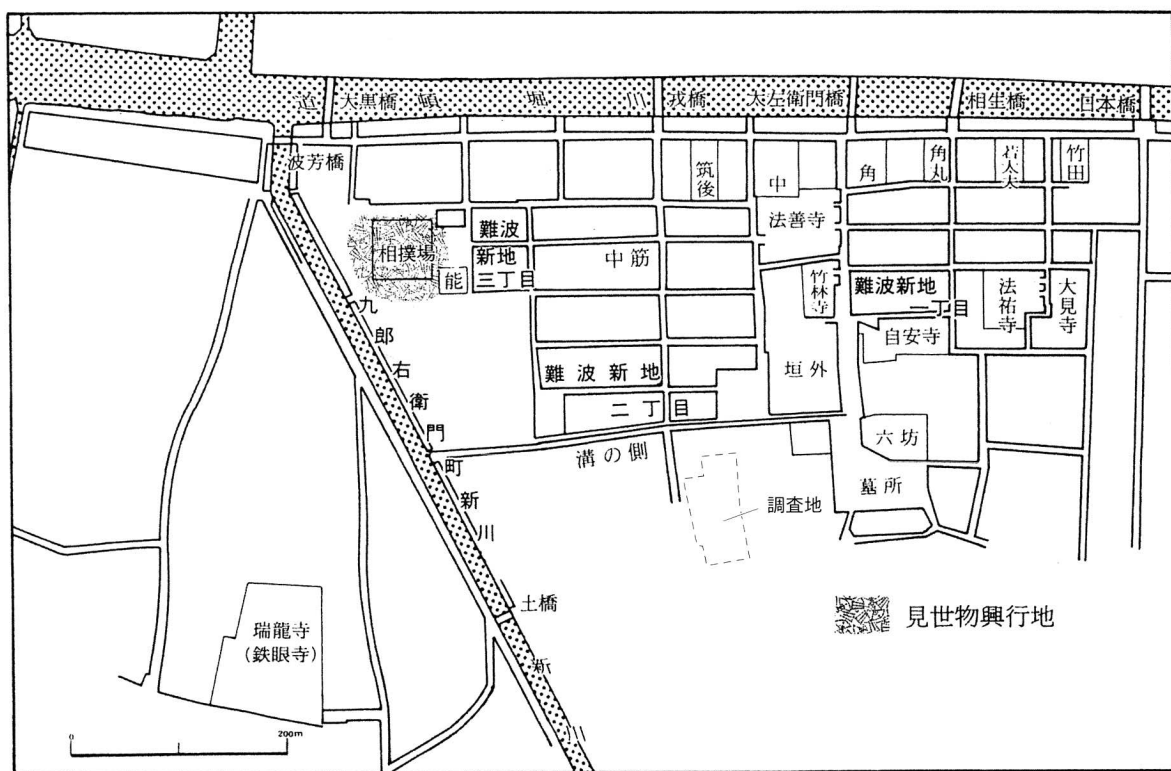


図4 1791(寛政3)年の難波新地付近図[田中豊・藤田実1992]

献では、見世物場の情景を以下のように記述している。

「今の千日前に見世物小屋が建ったのは明治の初年で、その以前大阪唯一の見世物興行地は、南地溝の側(現在の難波新地5番丁、市電戎橋筋停車場から一筋南の辻を西へ入った南側)であった。無論、その頃、アノ辺は今日のやうに人家稠密の地でなく、殆ど野原同様で、見世物といふても年中あるわけではなく、筵囲ひの一時的のが多く、年の暮に小屋掛けして、正月早早興行を始め、二月から三月にかけて人気を呼ぶことになってゐた。さて其の興行物の種類は、年年異同はあったが軽業・足芸・手品・細工人形・安本亀八の活人形、さては奇形児の類で、かの有名な軽業師早竹虎吉は当時当所での権威者であった。この溝の側見世物は、明治十年以後もまだ其の名残を留めてゐたが、千日前が繁盛するにつれ、いつか其の方へ引越して了ひ、跡には普通の町家が立並ぶやうになった。」

続いて千日墓所について触れる。千日墓所は図6のように、調査地と一区画を隔てて東側に広がっていた。

大坂夏の陣(1615年)の終了後、大坂藩主を命ぜられた松平忠明は、灰燼に帰した大坂市街を再建するに当って、それまで市中の各所に散在していた寺院や墓地を、市街地周辺部に移転・統合した。その一つが千日墓所である。現在の千日前付近は当時西成郡下難波村に属したが、地味が悪い荒地であった。そこで1618(元和4)年、従来「三ツ寺東之方、畳屋町之間」にあった墓地を主として、阿波座・津村・上難波等にあった墓地を統合して、この地へ移すことになった。当初、墓所の広さは南北41間・東西40間で、その内に南北5間1尺・東西3間1尺の焼き場(火屋)があった。しかし時代が下り手狭になると、1711(正徳元)年には隣接する南の畑地1反2畝歩、さらに1716(同6)年には東に隣接する畑

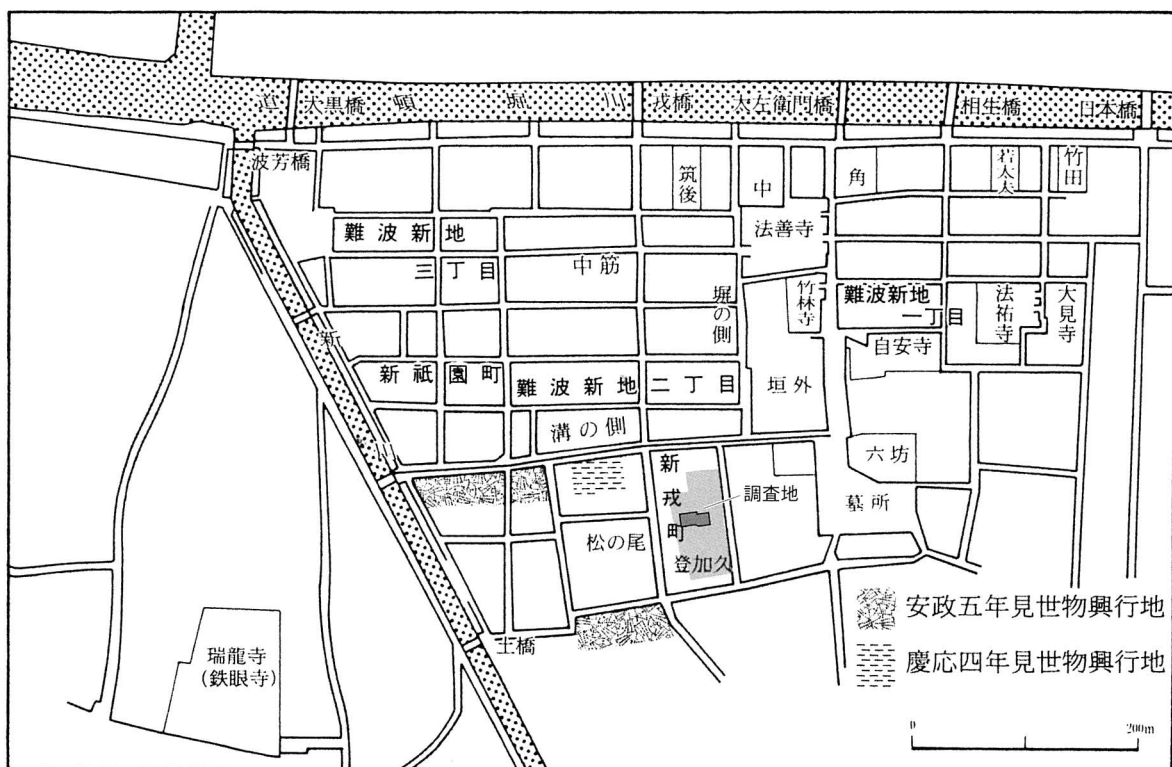


図5 幕末の難波新地付近図([田中豊・藤田実1992]に加筆)

地3反5畝16歩が、土葬場や灰捨場として使用することを許され、拡大していった[岡本良一・内田九州男1976]。また刑場も墓所の北西に設けられた。

墓所を管理し葬儀など一式を取り仕切るのが聖で、千日墓所では中央東よりに、東之坊・西之坊・南之坊・北之坊・中之坊・隅之坊の六坊があり、聖たちが住んでいた。

千日もしくは千日前という地名は、千日念仏回向を行った「千日寺」に由来することには異論はないが、千日寺が法善寺か竹林寺かで議論がある。両寺とも念仏回向を行ったことからの混乱だが、法善寺の最初の念仏回向は1644(寛永21)年で、竹林寺よりも22年早い。1784(天明4)年板の『難波丸綱目』は法善寺と竹林寺を一括して千日寺とするが、元は法善寺に千日寺の由縁を求めるべきだろう。ただ法善寺においても、1732(享保17)年、法善寺が3万5千日の念仏回向を興行するに当って、同寺を千日寺といい、同墓所を千日墓所とする略縁起を市中に配布し、墓所の亡者の回向料と名付けて、戒名1人前に3銭宛取ろうとしたところ、墓所聖との間に紛争が生じた。聖たちの言い分は、「法善寺が当地に移って来たのは1637(寛永14)年のことであり、当墓所は1621(元和7)年以来のものであるから、当墓所を千日の墓と呼ぶのは不当で、まして回向料を取るのはもつての外である」というもので、法善寺側が譲歩したのか、難波村庄屋の斡旋で和解が成立した。墓所は聖たちの主張するように、正式には「道頓堀墓所」と呼ぶべきだが、時代が下るにしたがい千日墓所の方が通りがよくなっていった。また、墓所には一般に他衆堂と呼ばれた本堂の阿弥陀堂をはじめ、施主堂・焼香堂・地藏堂・四九院堂・法華堂その他の諸堂があった

千日墓所での死体の処理は、当時すでに火葬が一般的であったが、極貧の市民などは薪代がないため、やむを得ず土葬にされた。1736(元文元)年から1814(文化11)年までの各1年間に、千日墓所で処理された死者の数は、1784(天明4)年の11,784人を最高に、1799(寛政11)年の5,426人を最低に、毎年ほぼ6～8千人であった。その内、土葬は1784年の1,285人を最高に、1805(文化2)年の179人

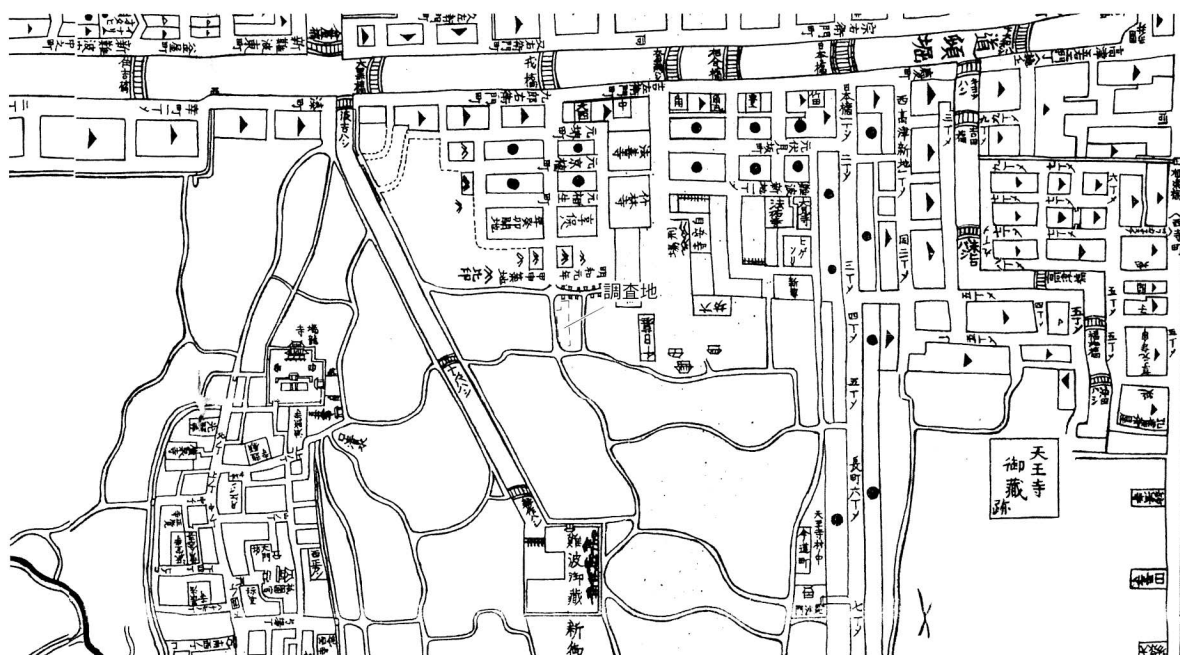


図6 千日墓所と調査地の関係図(1805(文化3)年『増修改正摂州大阪地図』に加筆・一部改変)

を最低に、毎年ほぼ2～400人であった。千日墓所で取扱った死者の数は、1621～1699年の79年間に316,680人、1711年まででは約402,000人、1750年まででは約711,700人で、毎年およそ7、8千人の死者を取扱った。

これだけの死体を処理していると灰捨場も灰の始末が大変で、1683(天和3)年には灰が山のようになったことから、大坂の惣年寄で道頓堀には格別の縁のある安井九兵衛を肝煎に、道頓堀川中町の者たちを世話人として、大坂町中から奉加銀を集め、灰を鳶田(飛田)の墓所へ移すことになった。幸いにも総額銀3貫936匁6分が集り、それ以降は10才以下の子供と貧乏人を除き、それ以外の者の葬礼に際しては、1人につき8文宛徴収することとなった。ところが10数年後の1697(元禄10)年、天王寺惣坊衆の苦情から、鳶田へ灰を捨てられなくなり、元通り墓所内で始末することとなった。1711(正徳元)年、聖たちの持畑(字東河原)を灰捨場にしたが、わずか4年後には、早くも灰捨場の場所替えが願い出され、新規に南北31間・東西11間の畑を灰捨場にした。

明治維新の大変革は千日墓所にも波及し、1870(明治3)年4月に刑場は廃止され、焼き場と墓地は阿倍野へ移転した。これが現在の阿倍野墓地で、当時は俗に「南の新墓」と呼ばれていた。そして千日前は繁華街として栄えていくことになる。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

1) 調査に至る経緯

調査地は御堂筋から東へ130m、千日前通から南へ130mの、もと大阪市立精華小学校に位置する。この校庭で、遺跡の存否を把握するために4箇所の試掘坑(各4 m²)を設定し試掘調査(NB10-1次)[大文研2010]を、2010(平成22)年5月11・12日の2日間行った(図7)。その結果、江戸時代の遺構・遺物が多数検出されたことから、難波1丁目所在遺跡B地点として本調査を行うこととなった。

当地は江戸時代の大坂七墓で最大規模の「千日墓所」の西側に隣接し、幕末以来、見世物場となる難波新地の「溝の側(みぞのかわ)」の南側であることから、当時の繁華街の状況解明など、発掘成果が期待された。

2) 調査の経過

調査にあたり、NB10-1次調査の試掘坑の1つを含むように南北7 m×東西20m、140m²の調査区を設定した(図7)。調査は2010年9月14日に着手し、西側から機械掘削にかかった。近現代の整地層を重機で除去した後、人力掘削で調査を行う予定であったが、当初予定範囲の南端で東西方向のコン

クリート基礎が出現したため、大阪市教育委員会と協議し、3 m北へ調査区をずらして掘削を開始したが、東へ10mほど掘り進んだところで、今度は北端で消火栓と旧防火水槽に当たったため、再度南へ調査区をずらして掘削した。最終的には途中でクランク状に曲がる平面形となった。

また西半で、旧校舎のコンクリート製布基礎を検出した(図版7)。これについては、9月15・16両日に写真撮影と図面作成を行った。

調査終了後に埋戻して旧に復し、10月16日に器材を搬出して全ての現場調査を終えた。

調査終了後は、出土した遺物および現地で作成した図面・写真を大阪文化財研究所難波宮調査事務所に搬入し、整理作業を行った。遺物については洗浄・注記・接合・復元作業の後、必要な遺物の実測を行った。

報告書の編集は2011(平成23)年5月から実施した。調査時の平面・断面図および遺物実測図をパーソナルコンピュータを使用してデジタルトレースし、調査時の写真および専門の



図7 調査区配置図

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

カメラマンに委託した遺物写真のスキャニングデータと執筆した原稿を合わせて、ページレイアウトソフトによって割付けしたデータをもとに、印刷・製本作業を外部委託して報告書を完成させた。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序

調査地の基本層序は下記のとおりである(図8・9、図版1)。

第1層：層厚20～40cmの黄褐色(10YR5/6)細礫質粗粒砂からなる整地層で、現在の運動場用に施工されたものである。

第2層：層厚5cmの黒色(10YR2/1)の現代のアスファルト層である。

第3層：層厚20～30cmのレンガなどの瓦礫を多く含む、黄褐色(10YR5/6)細礫質粗粒砂の近～現代整地層である。

第4a層：西壁から東に4mの範囲に分布する、層厚10～80cmの浅黄橙色(7.5YR8/6)粘土～粗粒砂質細礫からなる近代整地層で、旧校舎のコンクリート製布基礎はこれを掘り込んでいる。

第4b層：調査区西半の南壁のみに見られる層厚10cmのオリーブ褐色(2.5Y4/6)細礫からなる近代の整地層である。調査区南西隅のコンクリート製フーチングは本層を掘り込む。

第4c層：層厚20～30cmの灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粗粒砂の整地層である。

第5層：調査区西半のみに分布する、層厚30～40cmの炭・漆喰片・焼土偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂の整地層である。炭・焼土は1868(慶応4)年正月の大火に由来する可能性がある。出土遺物には、19世紀中葉～第3四半期を下限とする国産陶磁器・土器類、瓦類のほか、中国産磁器・土製品・石製品などが含まれる。

第6層：2層に細分される整地層で、出土遺物には19世紀前葉～中葉を下限とする国産陶磁器・土器類、瓦類のほか、土製品・石製品などが含まれる。

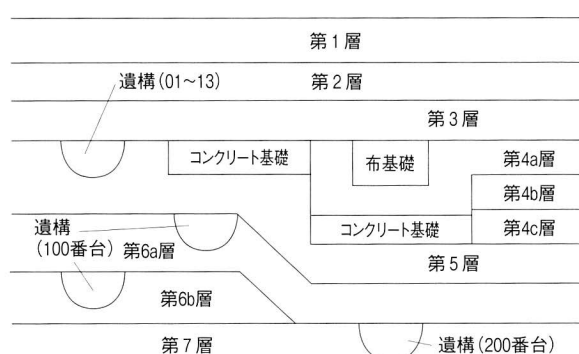


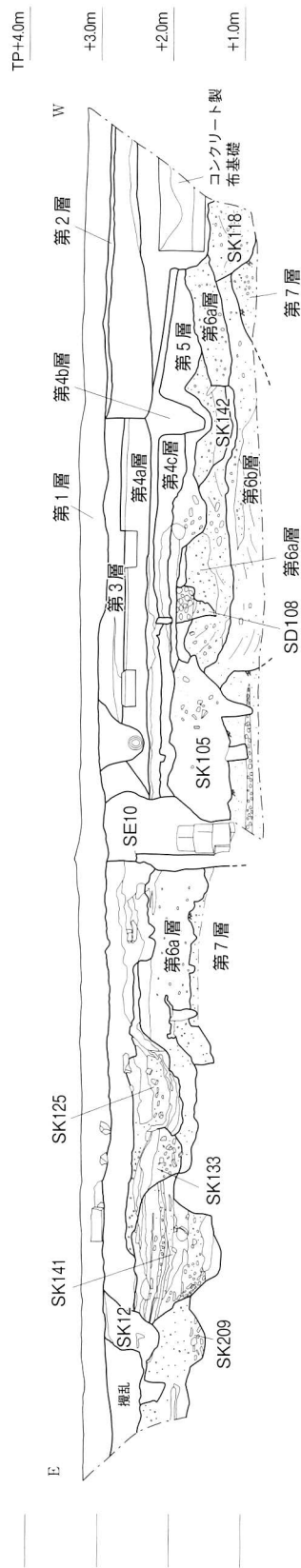
図8 地層と遺構の関係図

第6a層は層厚30～50cmの褐色(10YR4/4)色の細礫質粗粒砂の整地層である。

第6b層は調査区西半の南壁付近のみに分布する、漆喰片を含む層厚20cmの暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂の整地層である。

第7層：層厚30cm以上の褐色(10YR4/4)粗粒砂の自然堆積層で、層厚10cmの細～中礫層を挟む。摩滅した土師器片を含む。

南壁断面



西壁断面

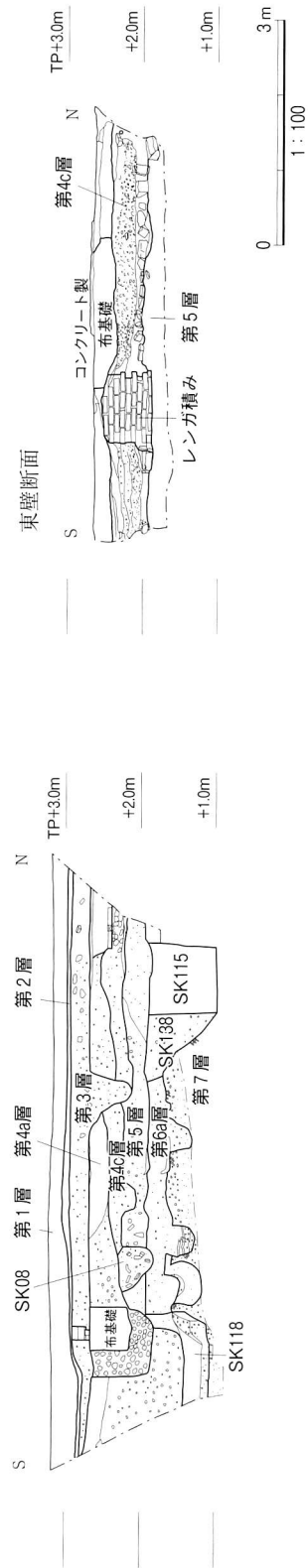


図9 地層断面図

第2節 遺構と遺物

1)江戸時代後半の遺構と遺物(第7層上面)

第7層上面では、穴蔵・土壇・小穴などが検出され、19世紀前～中葉の遺物が出土した(図10～15、図版2・3・8・10)。なお、土製品類は図版8に写真のみを掲載した。

i)穴蔵(図11、図版2)

SX201 穴蔵は掘形天端から東西3.1m、南北2.4m、深さ0.8m、垂直に掘り込んで、土留めの板材を壁面に沿って垂直に立て、直径15～25cmの杭で板材を押さえた後、幅0.6mのやや傾斜したテラスを残して、下端で東西1.3m、南北1.5m、深さ0.8mの土壇をほぼ垂直に掘り、壁面に板材を当てて直径8cmの杭で板材を押さえたものである。小さな地下式収蔵庫と考えられる。上段の板材のみが焼けており、埋戻されてから火を被ったと推測される。

出土遺物は陶磁器類のほか、土製品と瓦類がある(図13・15、図版8・10)。1・2は中国産青花碗である。1は外面に花唐草文を施す。2は内外面に仙芝祝寿文を施す。3は関西系磁器の蓋である。4・9は肥前磁器の染付である。4は碗で、内外面に網目文を施す。9は方形の皿である。5・7・8は関西系陶器である。5は蓋物で灰落としに転用している。7は鉢、8は鍋である。6は軟質施釉陶器で、透明釉を施釉する台付灯明具である。10は明石産播鉢である。11はミニチュア土製品で、皿である。以上は19世紀第2四半期～中葉のものであろう。このほかに左巻き三巴文軒丸瓦20、橘文鎌唐草21・23、橘文軒平瓦22が出土した。

ii)土壇(図10・12、図版2・3)

SK202 直径0.8m、深さ0.3mの円形土壇で、漆喰含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK203 南北1.1m以上、東西1.9m、深さ0.2mの土壇で、漆喰含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK204 南北0.6m、東西1.6m、深さ約0.3mの土壇で、黒褐色(2.5Y3/2)細礫の薄層を挟在する黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SK209 直径0.8m以上で、ほとんどが調査区外となる。深さ0.3mの第6a層を埋土とする瓦溜である。

SK210 南北4.5m、東西6.5m、深さ0.3～0.5mで、黒色(N2/0)シルト～暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする(図17)。陶磁器類のほか、土人形・瓦が出土した(図14・15、図版8)。12・13は瀬戸美濃焼磁器である。12は染付碗である。13は色絵碗で、高台内に赤色で文字を書く。14・15は肥前磁器である。14は鉢で、内面に仙芝祝寿文を施す。高台内に焼継印がある。15は染付皿である。口縁部は口紅となる。19は土人形で、灯籠である。以上は19世紀前半～中葉のものであろう。このほかに左巻き三巴文軒丸瓦24・25、橘文鎌唐草26～30、蛇の目文軒棧瓦31・32、無文一文字瓦33が出土した。

SK211 直径1.2m、深さ0.3mの円形土壇で、暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。16は

軟質施釉陶器の灯明台である。底部に「湊焼」の刻印があることから、堺地域で焼かれていた湊焼と思われる(図14)。

SK213 南北2.0m、東西4.0m、深さ0.3mの土壇で、暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。陶磁器類および瓦が出土した(図14・15)。17は肥前磁器の染付碗である。いわゆる広東碗の形態で、

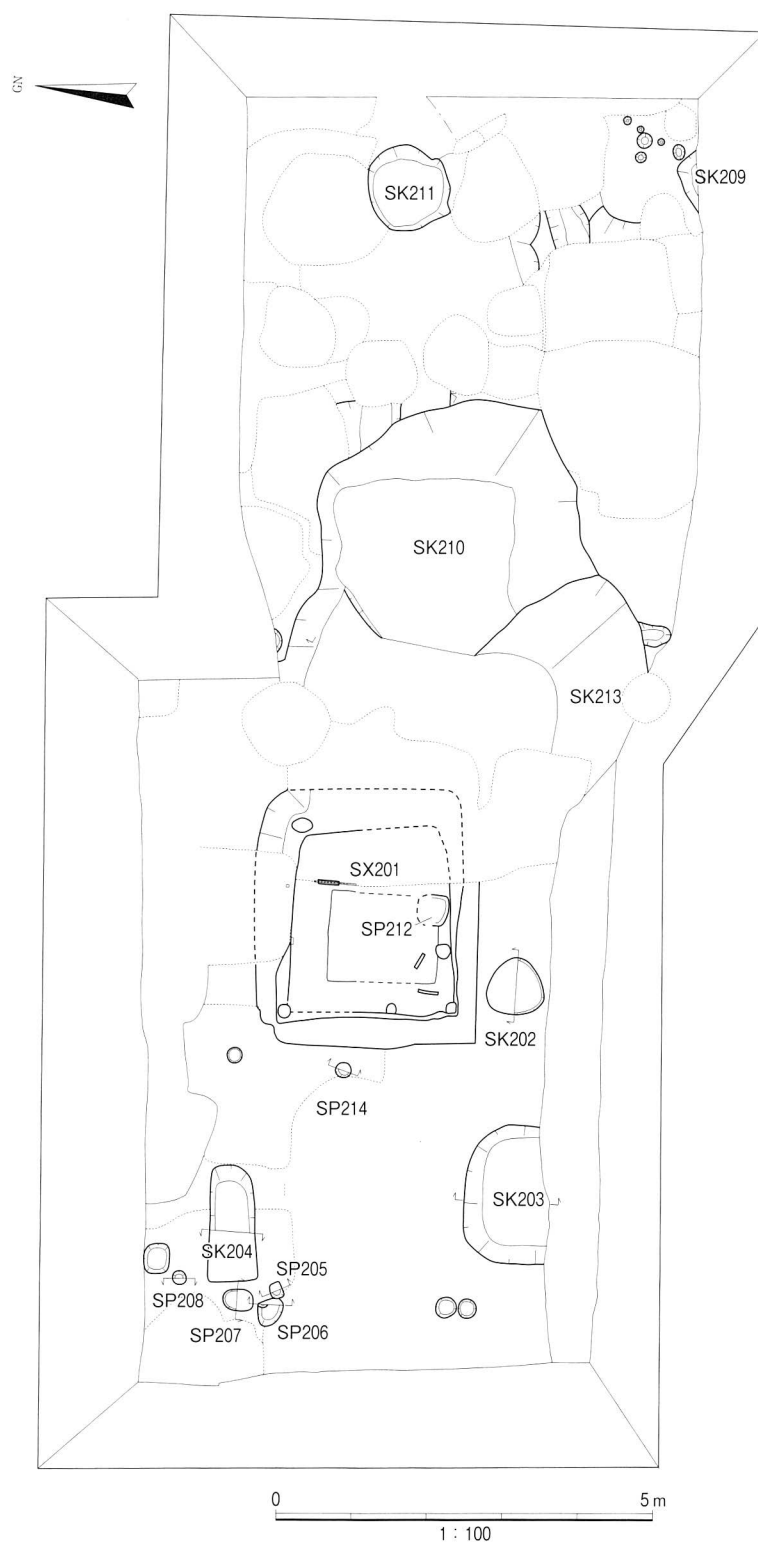
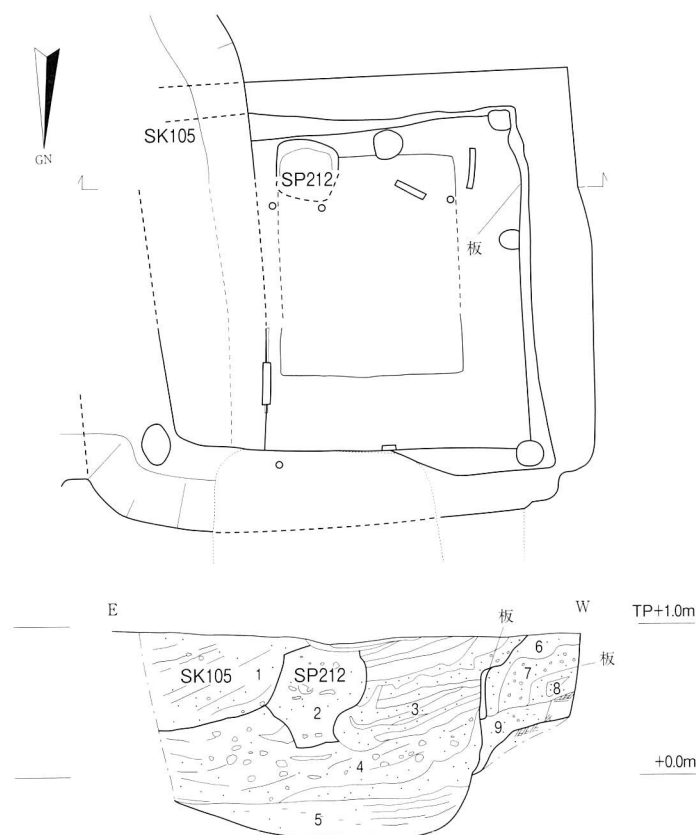


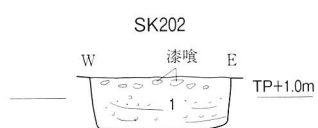
図10 第7層上面遺構平面図



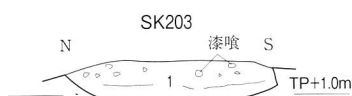
- 1 : 暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂
- 2 : 黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質シルト
- 3 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト
- 4 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂質シルト
- 5 : 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂質シルト
- 6 : 黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質シルト
- 7 : オリーブ褐色(2.5Y4/6)細礫質粗粒砂
- 8 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂
- 9 : 灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂

0 2m
1 : 50

図11 SX201平面・断面図



- 1 : 漆喰含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粗粒砂



- 1 : 漆喰含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂



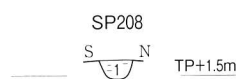
- 1 : 黒褐色(2.5Y3/2)細礫
- 2 : 黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂



- 1 : 暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂



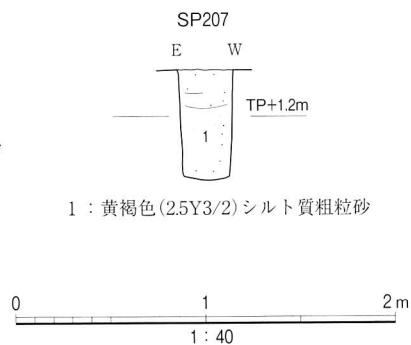
- 1 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂



- 1 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂



- 1 : 暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂



- 1 : 黄褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂

図12 第7層上面遺構断面図

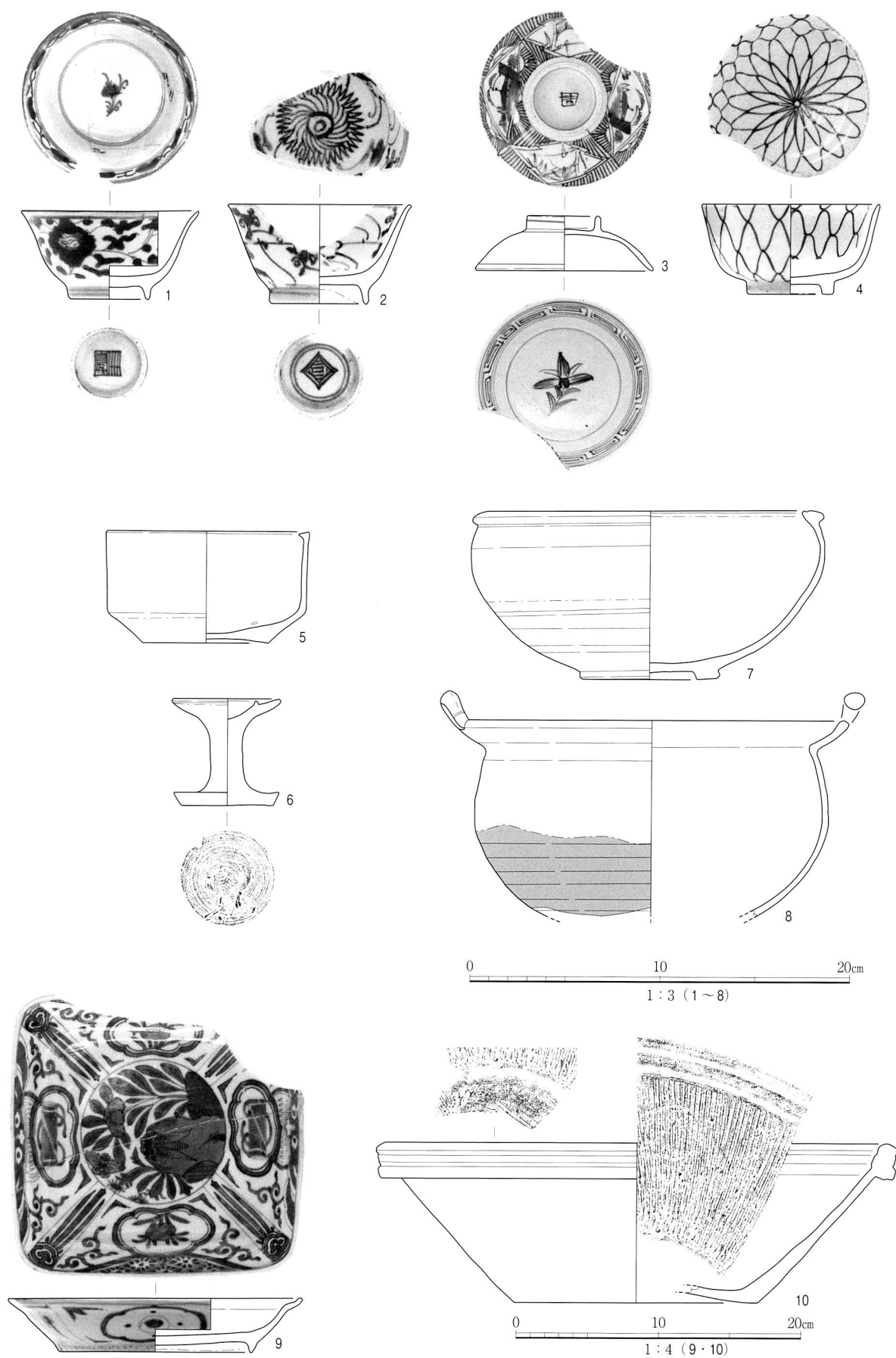


图13 SX201出土遗物实测图

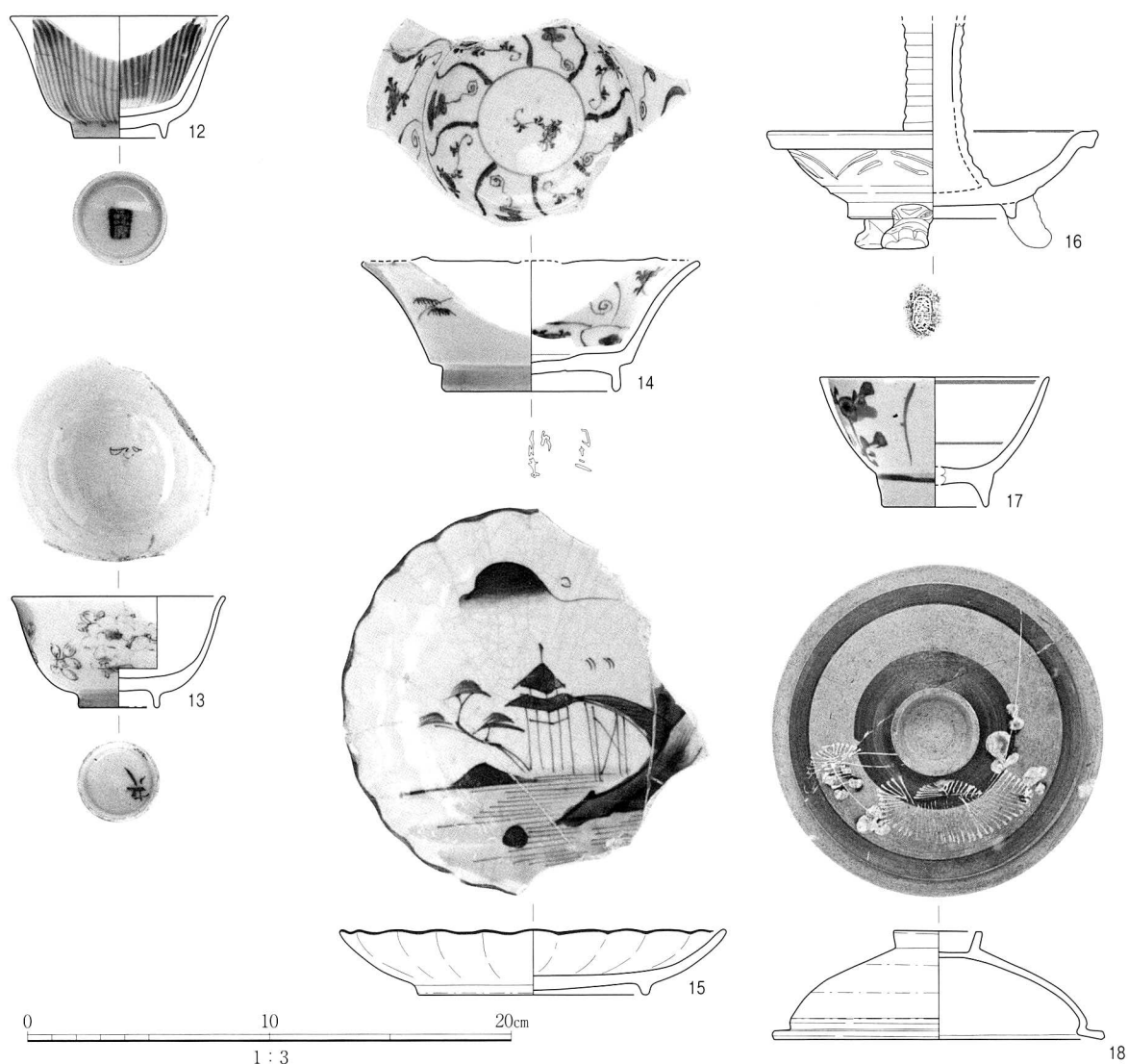


図14 第7層上面遺構出土遺物実測図
SK210(12~15)、SK211(16)、SK213(17・18)

外面に仙芝祝寿文を施す。18は関西系陶器の鍋蓋である。天井部に飛びカンナを施し、イッチン掛けで、花の文様を施文する。このほかに橘文軒棧瓦34が出土した。以上は19世紀第2四半期～中葉のものであろう。

iii) 小穴(図10・12、図版2・3)

SP205 直径約0.2m、深さ0.1mで、暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SP206 直径0.3m、深さ0.1mで、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SP207 直径0.3m、深さ0.5mで、黄褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SP208 直径0.2m、深さ0.1mで、オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂を埋土とする。

SP212 直径0.5m、深さ0.7mで、黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質シルトを埋土とする。

SP214 直径約0.2m、深さ約0.2mで、暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂を埋土とする。

2) 江戸時代末の遺構と遺物(第6a・6b層上面)



図15 第7層上面遺構出土瓦類
SX201(20~23)、SK210(24~33)、SK213(34)

第6a・6b層上面では、土壌・溝・小穴などが検出され、おもに19世紀第2四半期～幕末の遺物が出土した(図16~26、図版4・8~10)。なお、土製品類は図版8・9に写真のみを掲載した。

i) 土壌(図16・17、図版4)

先に主要な土壌、続いてその他の土壌について述べる。

SK105 南北4.5m以上、東西2.0m、深さ0.9mの土壌で、漆喰・陶磁器・瓦片を含む暗褐色(10YR3/3)シルト質粗粒砂で埋まる(図11)。国産陶磁器・土器類のほか、中国産磁器・土製品・瓦が出土した(図18・26、図版8)。35~38は中国産磁器である。35・36は徳化窯産の白磁である。35の口縁部は釉剥ぎしており、いずれも高台内は露胎となる。37は色絵碗である。外面に草花とみられるモチーフを緑・黄色などで上絵付けする。高台内には「大清乾隆年製」銘がみられる。38は青花の小碗である。外面には花唐草文を施す。39~41は瀬戸美濃焼磁器の染付である。39・40は碗である。41は皿である。42は関西系磁器の染付碗である。43は肥前磁器の染付で蕎麦猪口である。44は珉平焼の碗である。内外面に鮮やかな緑色釉を施す。45は萩焼でピラ掛けの碗である。46~50は関西系陶器である。46は鍋の蓋である。素焼きで、ボタン状のつまみが付く。天井部には飛びカンナを施し、イチチン掛けて梅花を施文する。47は爛徳利である。48・49は灯明皿と灯明受皿である。50は型作りの土瓶で、素焼きで

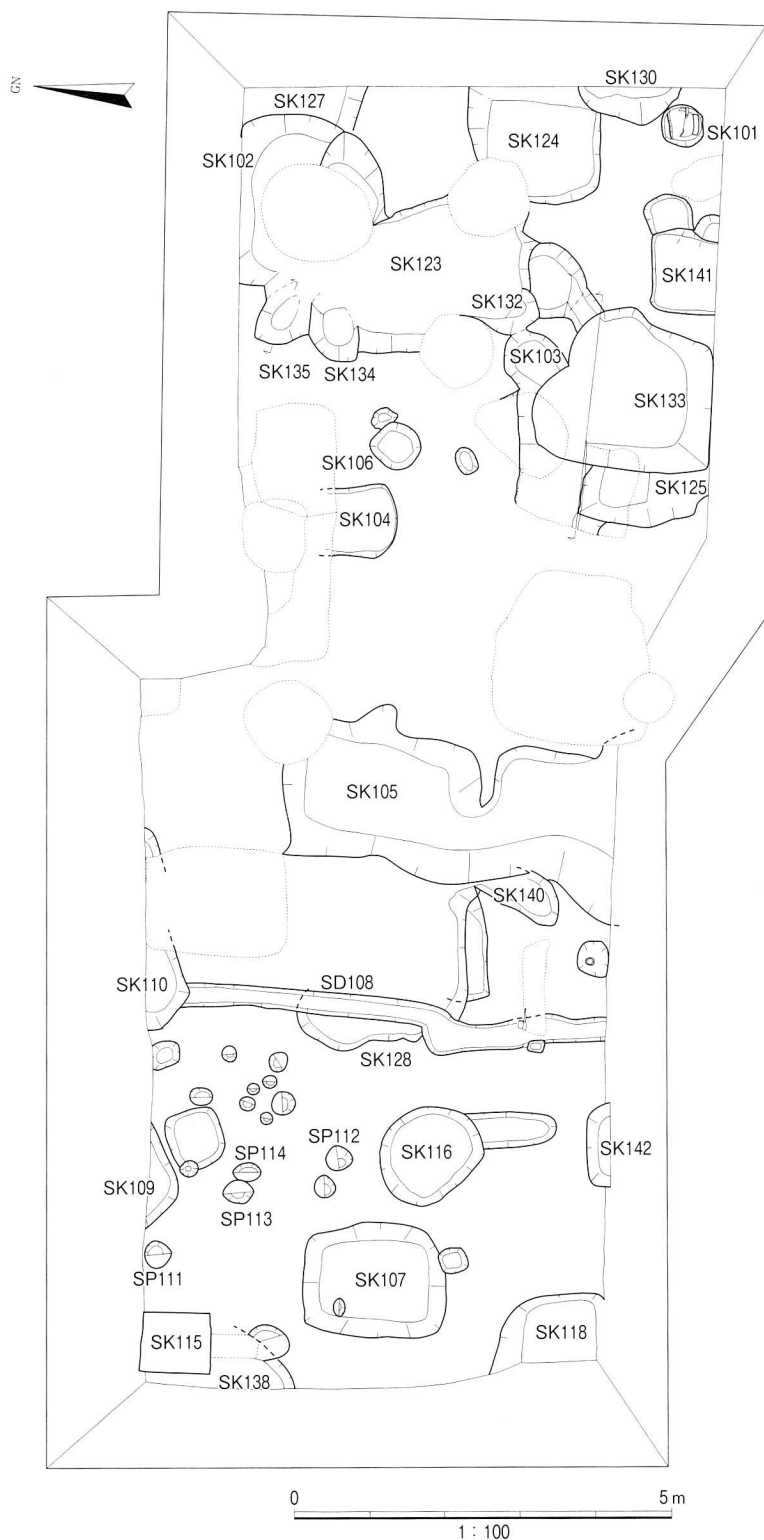


図16 第6a・6b層上面遺構平面図

ある。51は備前焼系焼締陶器の鉢である。内外面に煤が付着する。52は土師器羽釜である。53は丹波焼で大型の鉢である。口縁部は水平で、外面には菊花状の白色粘土を貼り付けている。54は土人形で、竈である(図版8)。以上は一部に19世紀初頭に遡るものを含むが、おおむね19世紀第2四半期～幕末のものであろう。このほか橘文軒平瓦188、橘文鎌唐草189・190、橘文軒棧瓦191・192が出土した(図

26)。191は「利兵衛」、192は「利右衛門」の刻印を有する。

SK123 SK102と接する南北2.3m以上、東西2.0m以上、深さ0.3mの土壌で、黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトを埋土とし、外縁にSK132の小土壌が掘り込まれている。国産陶磁器・土器類のほか、中国産磁器・土製品・石製品・瓦が出土した(図19～21・26、図版8～10)。55～58は中国産磁器である。55は外面瑠璃釉の碗で、外面には金彩で龍を描く。口縁部は口紅である。56・57は青花の小碗と碗である。いずれも外面に仙芝祝寿文を施す。56は高台幅が広く、高台および内側は露胎である。58は青花鉢である。外面には素描きで花と雲とみられる文様を施文する。59～61は瀬戸美濃焼磁器である。59は染付碗で、内外面に仙芝祝寿文を施す。60はホタル手の白磁碗である。梅花の文様を施す。61は青磁染付碗で、内面に梅花氷裂文を施す。62～65は関西系磁器の染付である。62・63はセットとなる蓋と碗である。口縁部に波濤文を施す。64・65は三田焼とみられる染付の蓋と碗である。内外面に梅の文様を施す。66～68は産地不明磁器である。66は染付の碗で、口縁部は端反となる。外面には柘榴の文様を描く。67・68は色絵である。67は赤絵の広東碗で、底部内面に文字を記す。68は赤絵の蓋である。69～74は肥前磁器である。69は紅皿である。外面に赤色顔料で、「たか赤小町紅」と記す。70～72は染付の碗である。73は花生である。底部には「トロ」と判読される墨書を有する。74は大型の鉢である。内面に楼閣山水文を施す。75～86は関西系陶器である。75は高台が高い特殊な形態の碗である。76～78は端反碗である。76は透明釉を施す。77は刷毛目文を施す。78は外面に鉄釉を施したのちイッチン掛けによる文様を描く。内面は白色釉を施す。79は凹凸碗で、口縁部に緑色釉を流し掛ける。80は筒茶碗で、鉄釉による縞模様を施す。81は灯明受皿である。82は蓋である。83は鍋の蓋である。素焼きで、ボタン状のつまみが付く。天井部には飛びカンナを施し、イッチン掛けで梅花を施

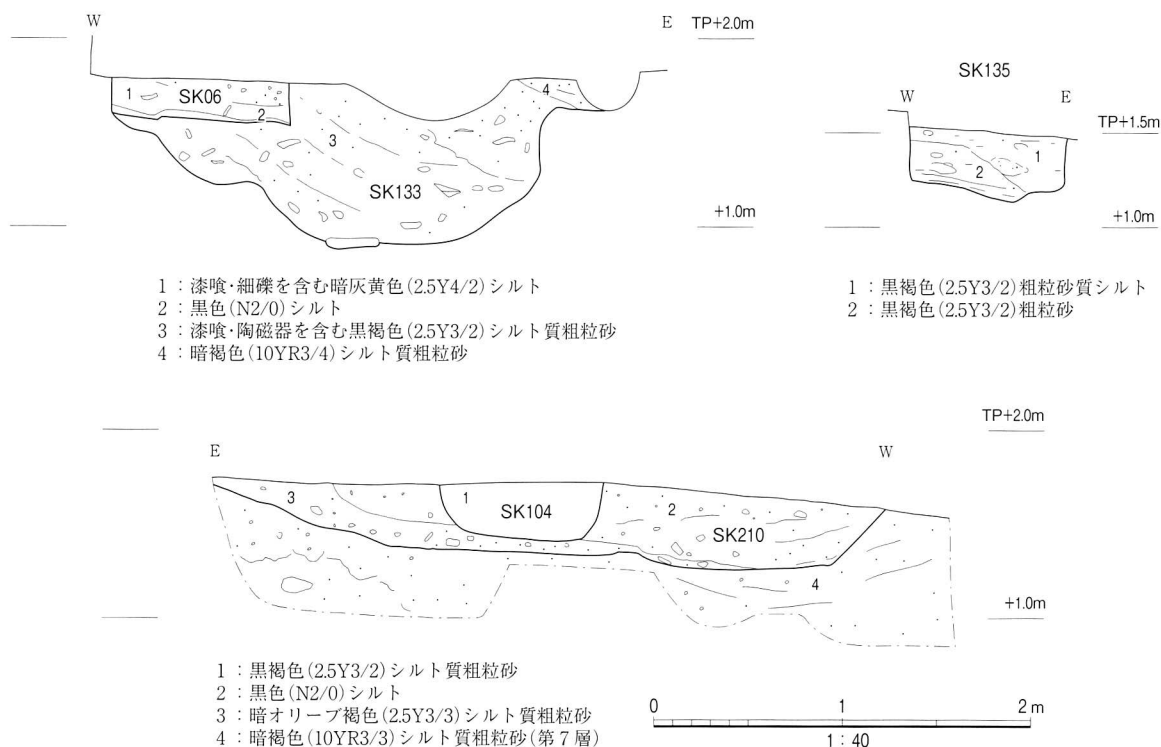


図17 第6a・6b層上面遺構断面図

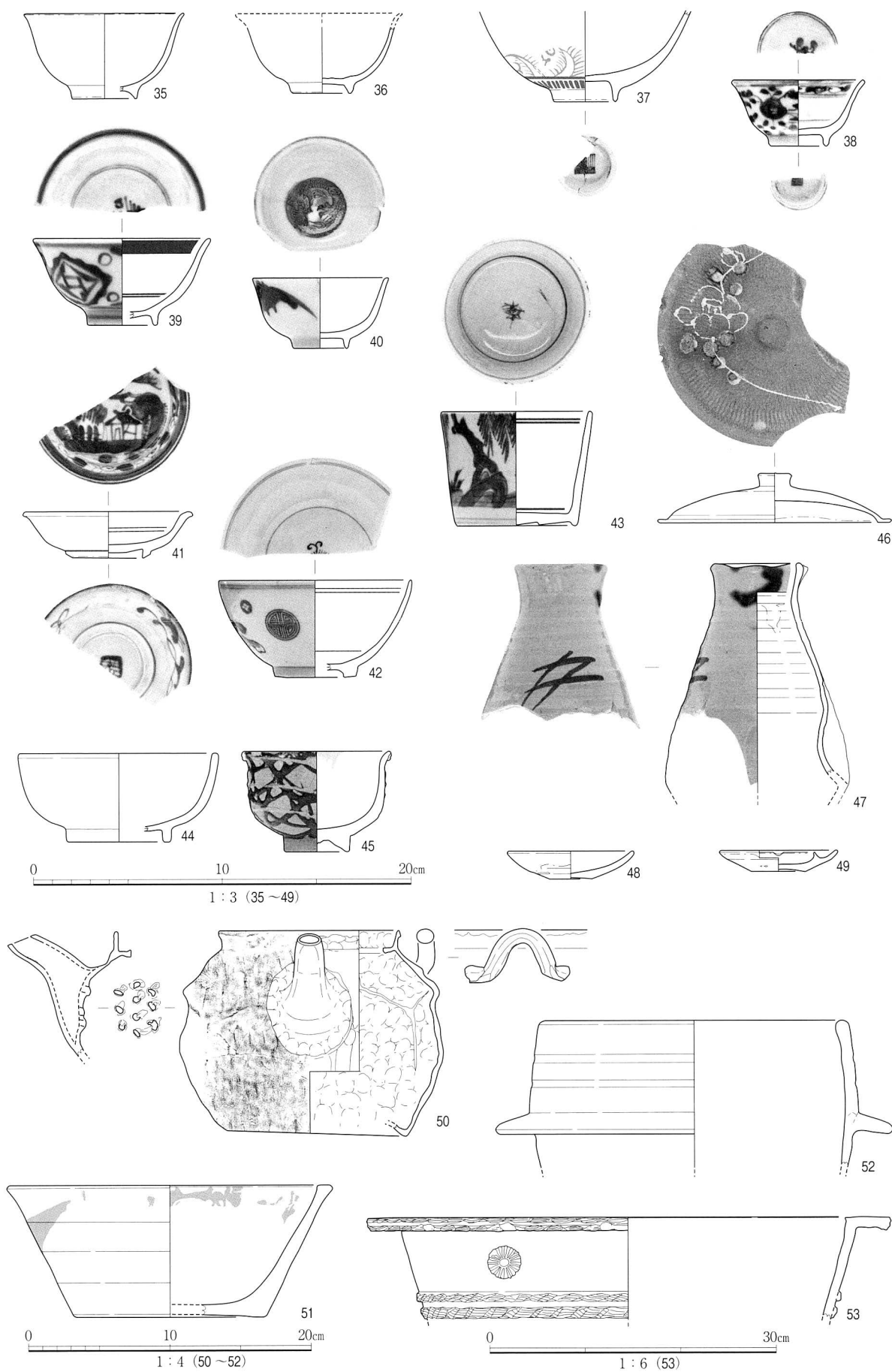


图18 SK105出土遗物实测图



图19 SK123出土遺物実測図(1)

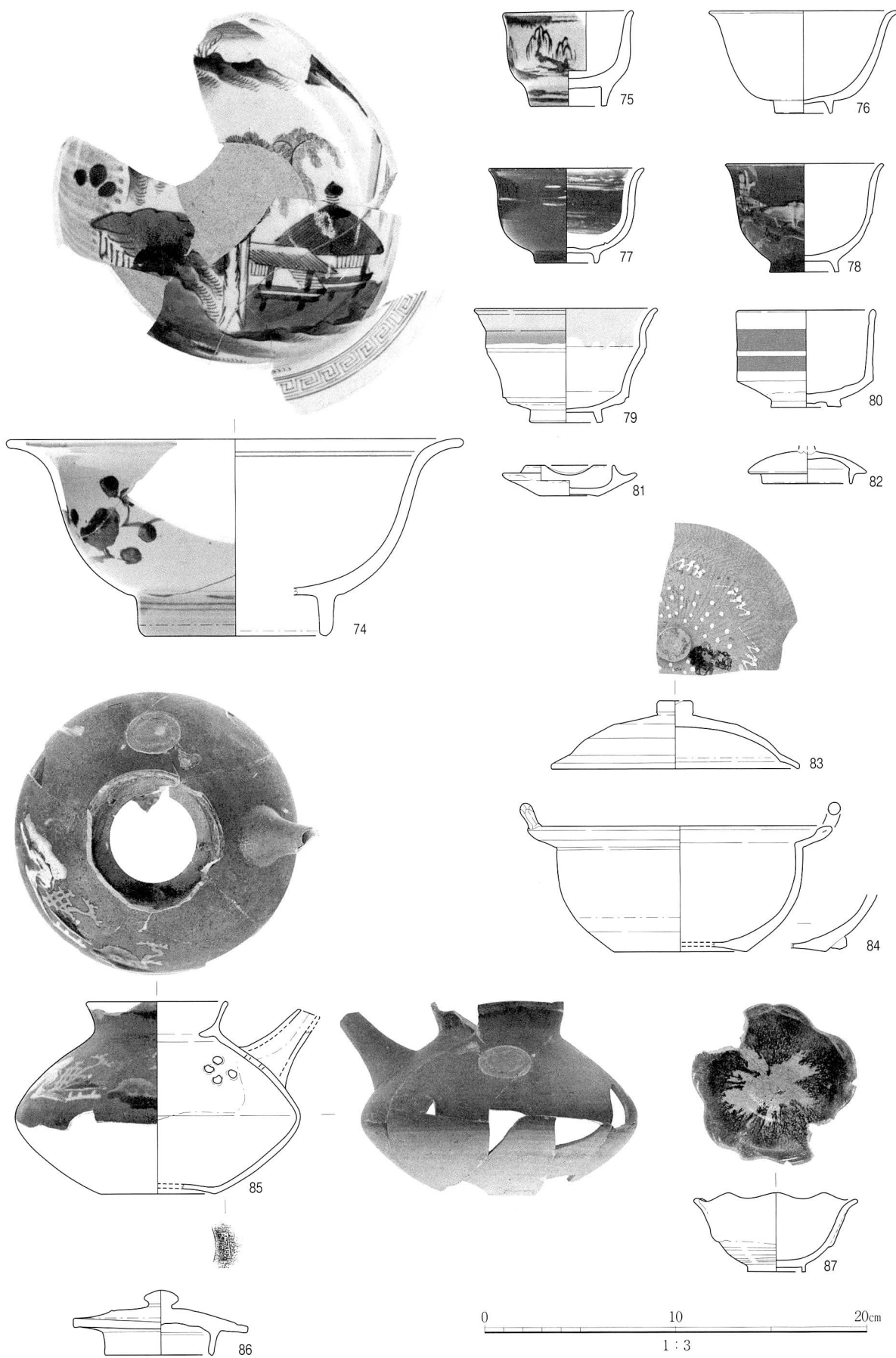


图20 SK123出土遺物実測図(2)

文する。SK105出土品と類似する。84は鍋である。85は土瓶である。口縁部が輪花状となる。外面にはイチチン掛けで文様を施し、「高尾」の刻印のある円形の粘土板を貼り付ける。底部には「火請□□」の刻印がある。87は萩焼と思われる小碗である。口縁部は輪花となる。86は肥前陶器の蓋である。88～92は瀬戸美濃焼陶器である。88はひだ皿である。89は外面に緑色釉を施す植木鉢である。90は錢甕で、底部に「久」の刻印がある。91・92はいずれも鉢で、外面には緑色釉を施す。93は丹波焼の仏花瓶である。94・95は軟質施釉陶器である。94は灯明受皿、95は台付灯明具である。96はバイ独楽である。このほか以下の土製品が出土した。箸置き97、土人形の地藏98・天神99・ネズミ100・牛101、ミニチュアの急須103・蓋104・105、鉦102、ミニチュアの石製品硯106、泥面子の人物107～112、動物113・114、意匠不明の泥面子115、家紋116～121、文字122・124、宝珠123である(図版8・9)。このほかに瓦類としては、左巻き三巴文軒丸瓦196、橘文軒棧瓦197が出土した(図26)。以上の遺物は一部に19世紀前葉に遡るものを含むが、おおむね19世紀第2四半期～幕末のものであろう。

SK125 南壁際で検出した、南北1.7m以上、東西0.9m以上、深さ0.6mの土壌で、瓦・レンガ片・

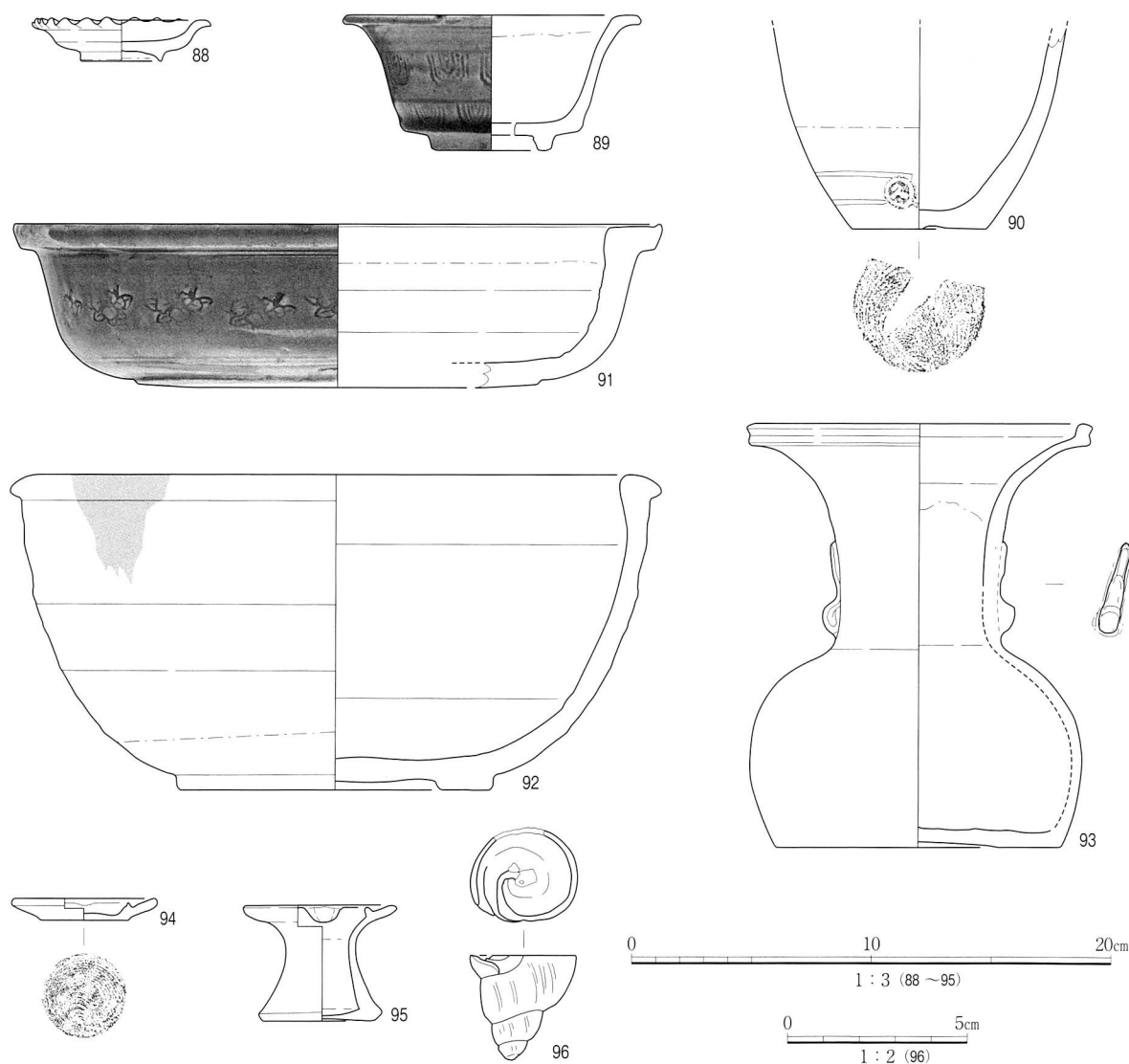


図21 SK123出土遺物実測図(3)



图22 SK125出土遗物实测图(1)

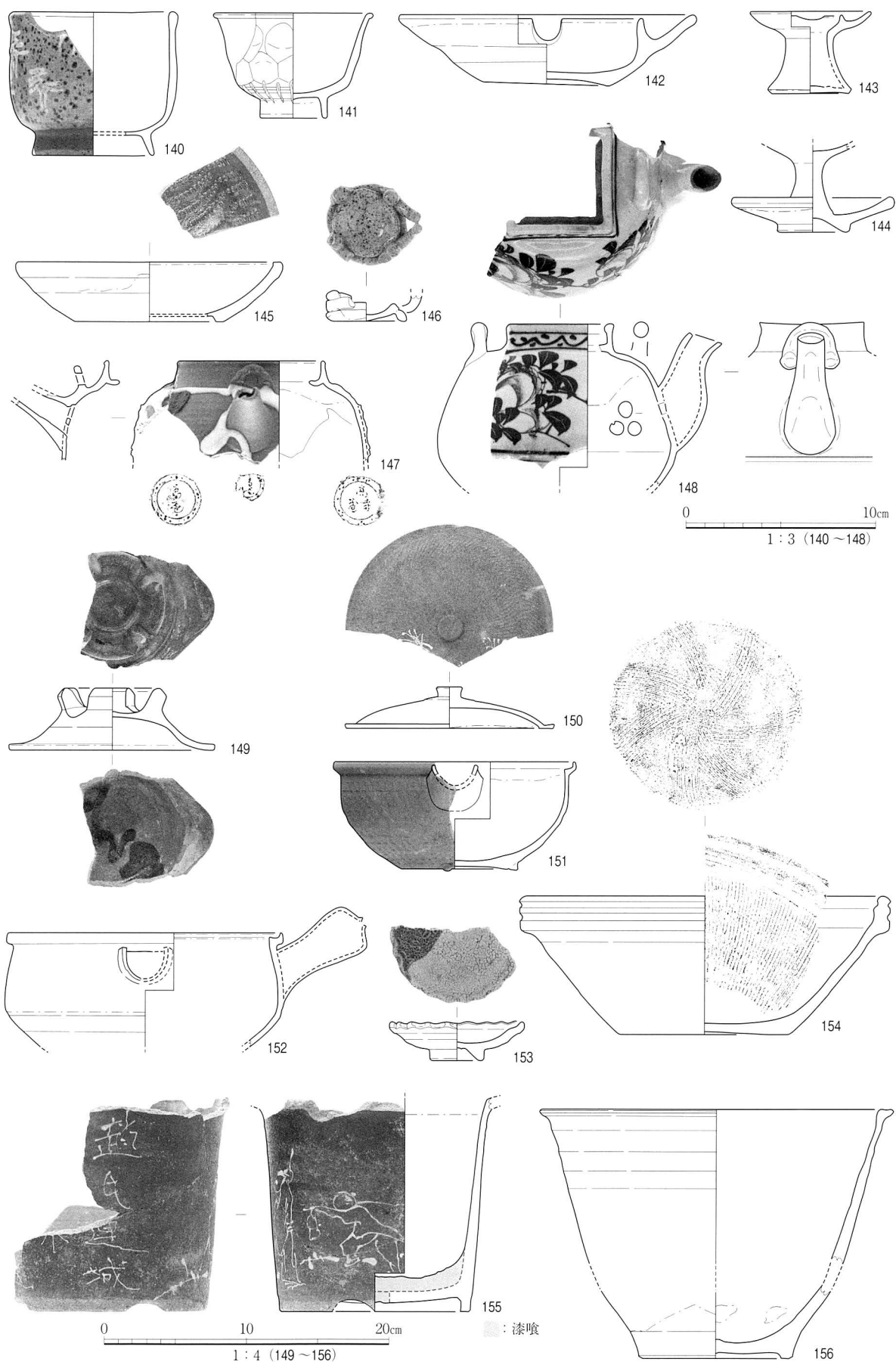


図23 SK125出土遺物実測図(2)

黄褐色(2.5Y5/6)粘土偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト質粗粒砂で埋まる。国産陶磁器・土器類のほか、中国産磁器・土製品・瓦が出土した(図22・23、図版8・9)。125・126は中国産磁器である。いずれも徳化窯産の白磁で、口縁部は釉剥ぎしており、高台内は露胎となる。125は赤上絵付で文字を記す。127～132は瀬戸美濃焼磁器である。127・128は薄手小杯である。いずれも青色顔料の上絵付けで、127は「本 朝ひ □」、128は「松本屋 小松□□□」と記す。129～132は染付の碗である。129は寸胴の湯飲み碗である。130～132は端反碗である。133～135は関西系磁器の染付である。133は寸胴の碗、134は蓋である。135は鉢である。136は産地不明磁器の色絵鉢で、赤絵を主とし、内面に文字を記す。137～139は肥前磁器の染付である。137は御神酒徳利である。138は内外面に網目文を施す鉢である。139は皿である。口縁部は口紅である。140～152は関西系陶器である。140は外面にイッチン掛けで松の文様を施す碗である。141は面取りした碗である。142は大型の灯明皿である。143・144は台付灯明具である。145は鉄釉を施すおろし鉢である。146は箸置きとみられる。147・148は土瓶である。147は素焼きで、白色釉を流し掛ける。体部外面の少なくとも3箇所に「高尾」あるいは「高尾寺」と刻印した粘土を貼り付けている。148は口縁部が方形を呈する。外面に鉄絵が認められる。149は鍋の蓋とみられる。平面形は隅丸の菱形を呈する。つまみの4箇所に切り込みを有し、内面には鉄絵を施す。150は鍋の蓋である。素焼きで、ボタン状のつまみが付く。天井部には飛びカンナを施し、イッチン掛けで梅花を施文する。SK105・123出土品と類似する。151は素焼きの行平鍋で、外面に茶褐色の顔料を縞状に塗布する。152は透明釉を施す行平鍋で、取手の先端に円孔を穿つ。153は瀬戸美濃焼陶器の皿である。白色釉と鉄釉を掛け分けする。155は丹波焼とみられる植木鉢である。

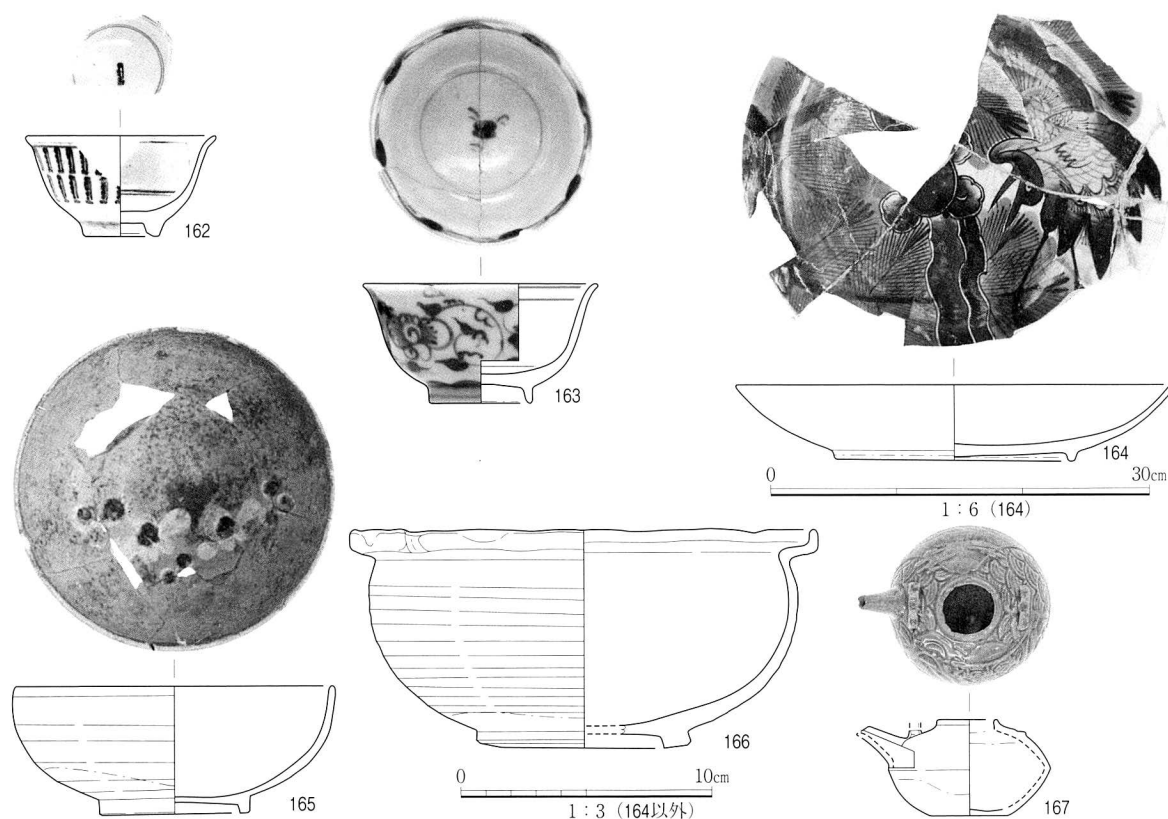


図24 SK127出土遺物実測図

底部内面には漆喰が厚く付着する。外面の文様は漢詩「夜送趙縱」の場面とみられ、「趙氏連城壁 由来天下傳」とイッチン掛けで文字が記される。154は明石焼の播鉢である。156は産地不明陶器の鉢である。内外面に灰白色の釉を施し、胎土には砂粒を多く含む。底部内面には目跡が残る。他に土製品類として、土人形の灯籠157、泥面子の人物158、銭159、恵比須161が出土した(図版8・9)。以上SK125出土遺物は、一部に19世紀前葉に遡るものを含むが、おおむね19世紀第2四半期～幕末のものと考えられる。

SK124 東壁際で検出した、南北1.8m以上、東西1.6m、深さ0.7mの土壇で、漆喰片を多く含む黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトを埋土としている。招き猫とみられる土人形160が出土した(図版8)。

SK127 調査区の北東隅で検出された南北1.5m以上、東西0.7m以上、深さ0.3mの土壇で、黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトを埋土としている。国産陶磁器・土器類のほか、中国産磁器・土製品が出

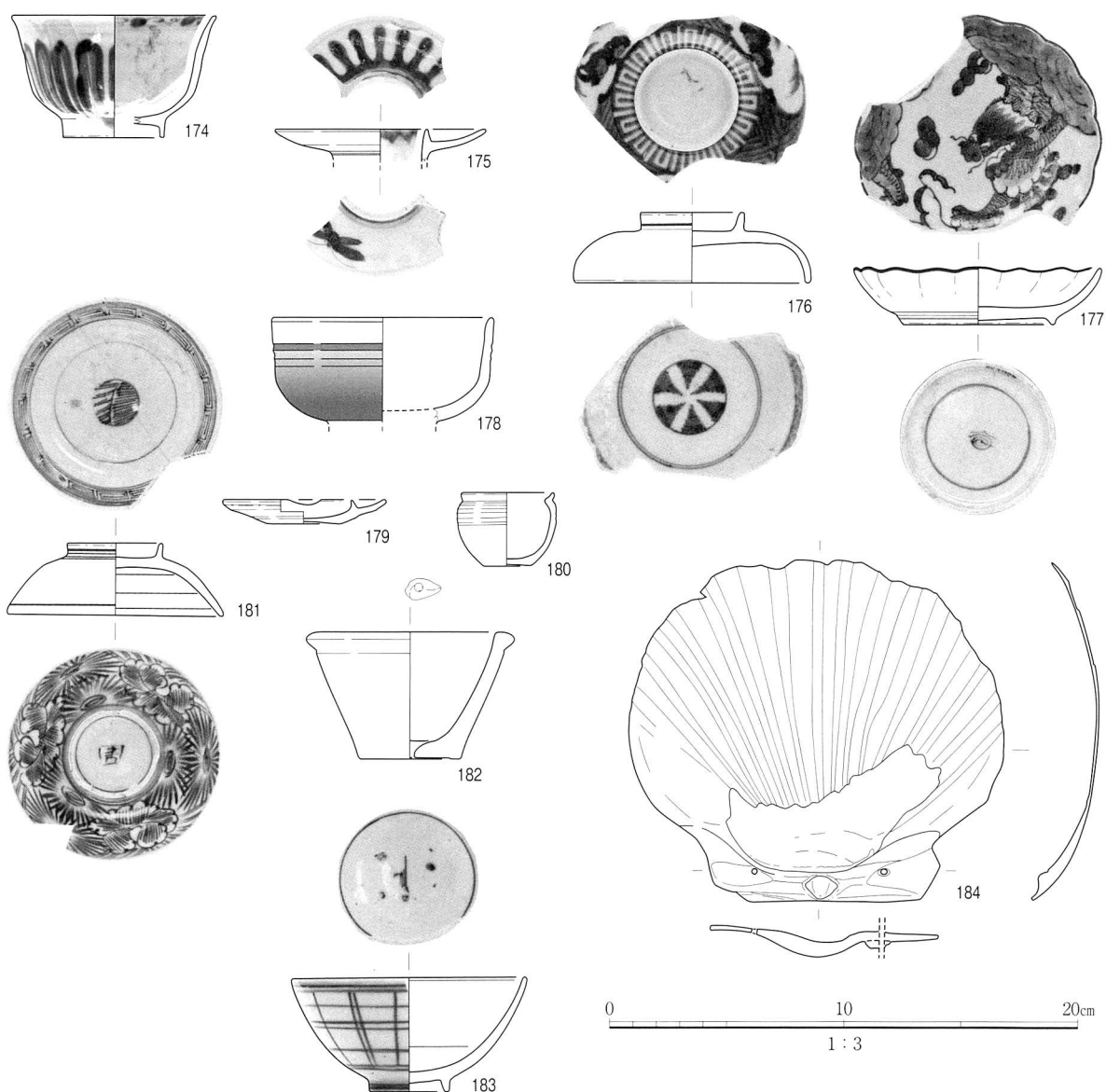


図25 第6a・6b層上面遺構出土遺物実測図

SK101(174~180)、SK109(181)、SK130(182)、SK133(184)、SK134(183)

土した(図24、図版8・9)。162は中国産磁器で、青花碗である。外面には清朝文字を施す。高台およびその内側は露胎である。163は瀬戸美濃焼磁器の染付端反碗である。164は肥前磁器の大皿で、口径は約34cmを測る。焼継している。165は関西系陶器の碗で、内面に梅の文様を描く。166は肥前陶器の鉢で、口縁部が輪花となる。167は軟質施釉陶器のミニチュア品で、土瓶である。他に土製品類としては、土人形の灯籠168および亀169、泥面子170～172、面型173が認められた(図版8・9)。以上SK127出土遺物は、おおむね19世紀中葉～幕末のものと考えられる。

SK101 直径0.5m、深さ0.4mの円形土壇で、火鉢などの土器を多く含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂で埋まる。国産陶磁器・土器が出土した(図25)。174・175は瀬戸美濃焼磁器の染付である。174は端反碗である。175は盃台である。176・177は肥前磁器の染付である。176は蓋、177は皿である。178は瀬戸美濃焼陶器の碗である。179は関西系陶器の灯明受皿である。180は備前焼の葉味入れである。以上は176が19世紀初頭以前に遡るものであるが、他は19世紀第2四半期～中葉のものであろう。

SK102 直径2.3m、深さ0.3mのほぼ円形を呈する土壇で、貝殻を多く含む黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトで埋まる。外縁にSK134・135の小土壇が取り付くように掘り込まれている。SK102からは橋文軒平瓦187が出土した(図26)。

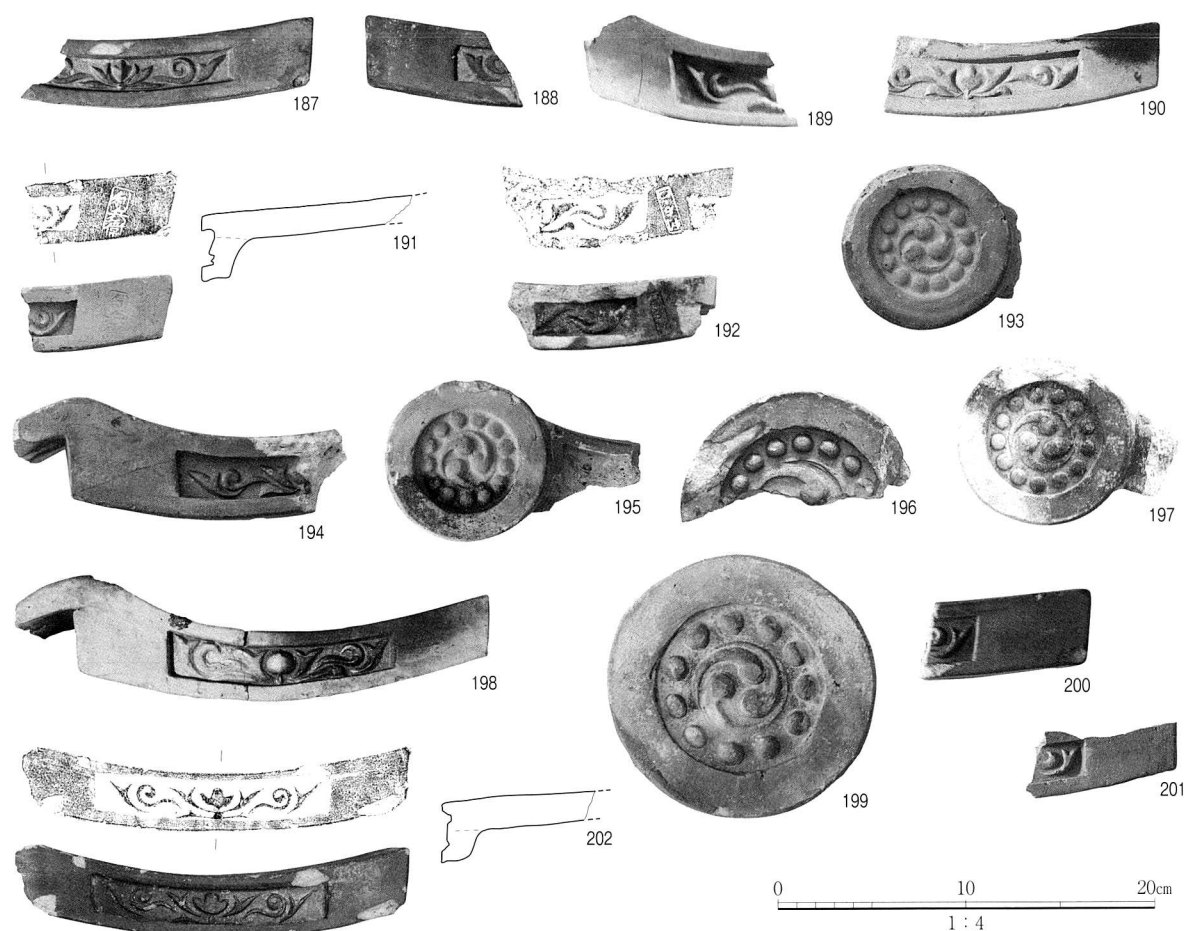


図26 第6a・6b層上面遺構出土瓦類

SK102(187)、SK105(188～192)、SK115(193・194)、SK118(195)、SK123(196・197)、SK130(198)、SK132(199・200)、SK133(201)、第6a層(202)

SK103 南北1.3m、東西2.7m以上、深さ0.3mの土壌で、SK133よりも古い。レンガと炭を含む黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトを埋土とする。

SK104 南北0.8m以上、東西0.9m、深さ0.3mの土壌で、黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂を埋土とする(図17)。

SK107 南北1.9m、東西1.5m、深さ0.3mの瓦溜である。軒瓦は出土しなかった。

SK109 北壁際で見つかった、南北0.4m以上、東西1.4m以上、深さ0.3mの土壌で、焼土で埋没する。181は関西系磁器の蓋である(図25)。内外面に素描きで花などの文様を描く。19世紀第2四半期～中葉のものであろう。

SK110 北壁際で見つかった、南北0.6m以上、東西1.5m以上、深さ0.3mの土壌で、炭と漆喰片を含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂で埋まる。

SK115 北西隅で検出した南北1.0m、東西0.8m、深さ0.9mの方形の穴蔵で、四周に板材を貼り付けていた。第5層土である、にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂で埋まる。SK138はこの穴蔵の掘形の可能性がある。SK115からは橘文軒棧瓦193、橘文鎌唐草194が出土した(図26)。

SK118 南西隅で検出した南北1.3m以上、東西1.0m以上、深さ0.7mの土壌で、有機物を含む灰黄褐色(10YR4/2)粗粒砂質シルト～細礫質粗粒砂で埋まる。橘文軒棧瓦195が出土した(図26)。

SK128 SD108と重複し、それよりも古い。南北1.8m以上、東西0.5m以上、深さ0.3mの土壌で、黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトを埋土としている。

SK130 東壁際で見つかった南北1.4m、東西0.5m以上、深さ0.2mの土壌で、黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトを埋土としている。182はSK130から出土した丹波焼の植木鉢である(図25)。底部中央にヘラによって円孔を穿つ。このほかに橘文鎌唐草198が出土した(図26)。

SK132 SK123の外縁に掘り込まれた直径0.7m、深さ0.2m、黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトを埋土とする土壌である。SK132からは左巻き三巴文軒丸瓦199、橘文軒平瓦200が出土した(図26)。

SK133 南北2.4m、東西2.2m、深さ0.8mの不定形の土壌で、SK125よりも新しく、漆喰・陶磁器を含む黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂を埋土とする(図17)。国産陶磁器・土器類のほか、ホタテ貝製の貝鍋184が出土した(図25、図版10)。184は柄を装着するための釘孔がある。このほか、ミニチュア土製品の碗185と芥子面子の卸金186(図版8)、橘文鎌唐草201(図26)が出土した。

SK134 SK102の外縁に掘られた直径0.6m、深さ0.2mの土壌で、オリーブ灰色(10Y5/2)粗粒砂を埋土とする。183は関西系磁器の染付碗である(図25)。外面には格子文様が認められる。

SK135 SK102の外縁に掘られた直径0.6m、深さ0.2mの土壌で、黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂～粗粒砂質シルトを埋土とする(図17)。

SK138 南北2.0m以上、深さ0.9mの土壌で、SK115の穴蔵よりも古い。褐色(10YR4/4)色の細礫質粗粒砂で埋まる。

SK140 南北1.2m、東西0.6m、深さ0.3mの土壌で、漆喰を含む灰色(7.5Y6/1)粗粒砂で埋まる。

SK141 南壁際で検出した南北0.9m以上、東西1.8m、深さ1.2mの土壌で、薄い炭層や黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粗粒砂層や黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粗粒砂層が互層になって堆積している。

SK142 南壁際で検出した幅1.1m、深さ0.3mの土壇で、炭を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粗粒砂で埋まる。

ii) その他の遺構および包含層出土遺物

SD108 長さ5.7m以上、幅0.3m、深さ0.2mの南北溝で、中央やや南でクランク状に西に屈折する。

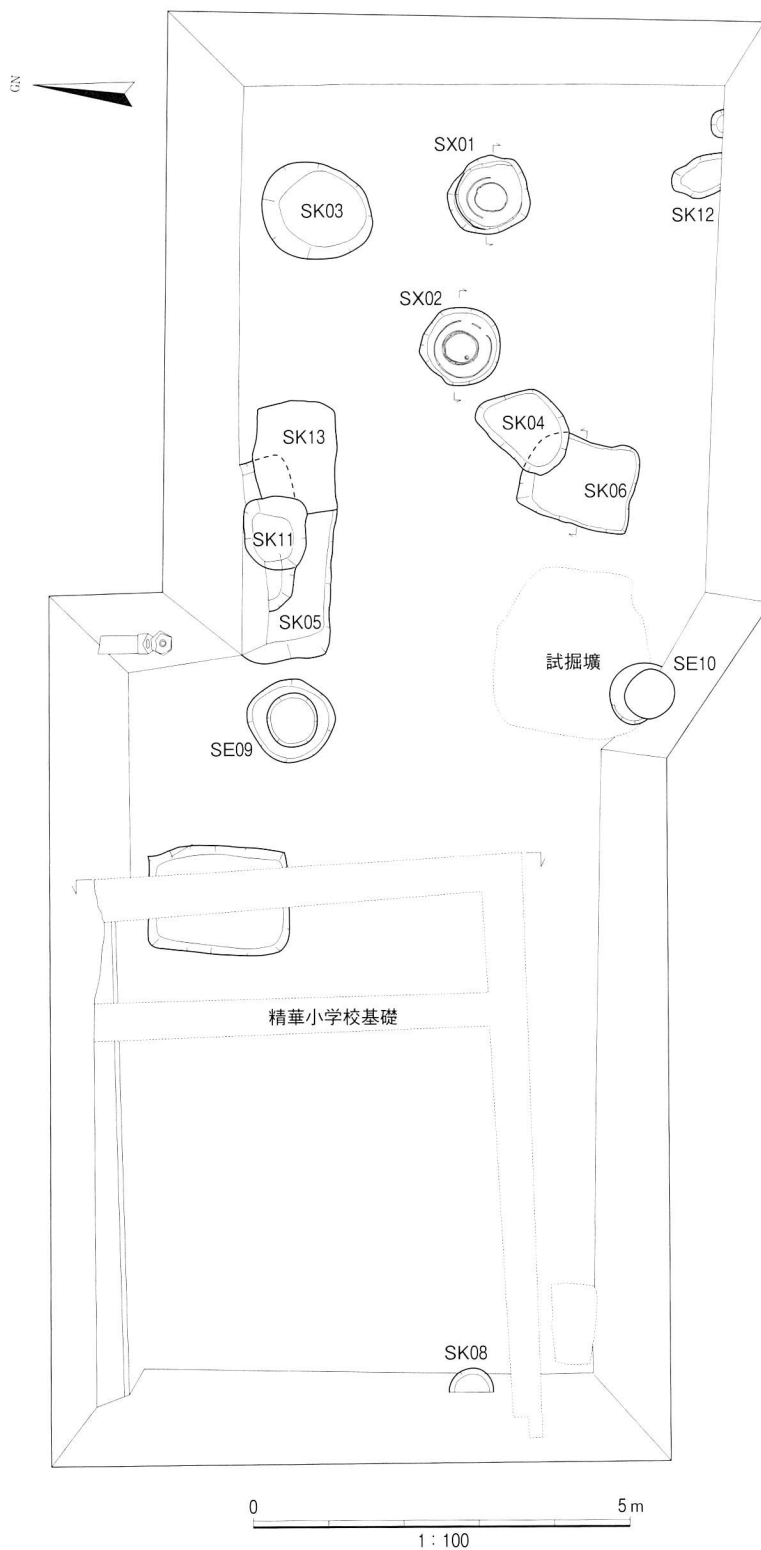


図27 第5層上面遺構平面図

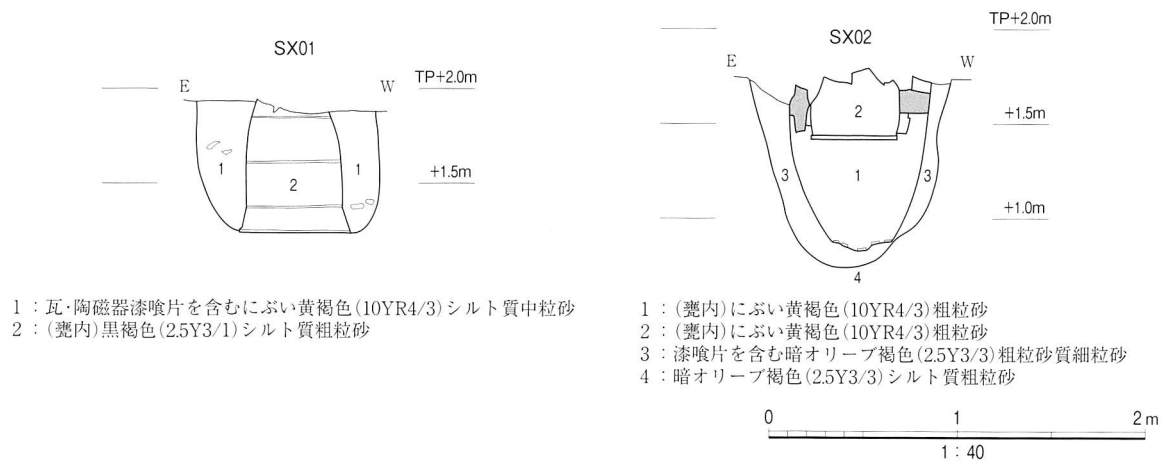


図28 SX01・02断面図

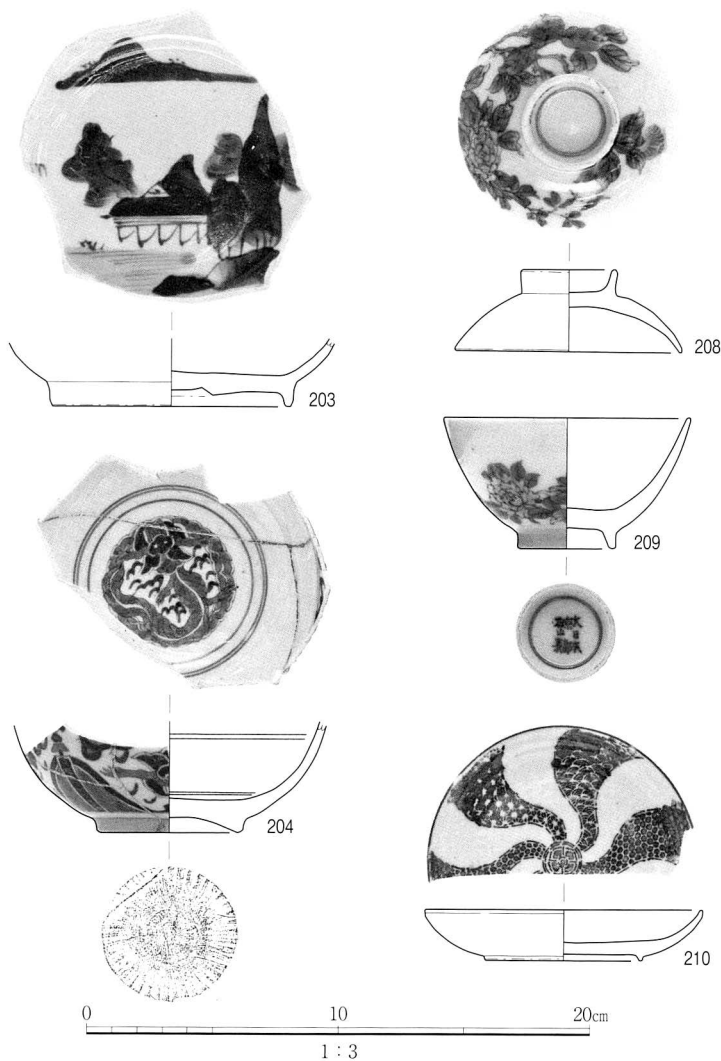


図29 第5層上面遺構出土遺物実測図
 SX01(203・204)、SX02(208～210)

形は瓦・陶磁器・漆喰片を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂で埋られ、甕内には黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粗粒砂が堆積していた。

焼土で埋没するが、南半はほぼ漆喰片で埋まっている。

SP111～114 直径0.3m、深さ0.2mの小穴で、黒褐色(10YR3/2)粗粒砂質シルトを埋土とする。その他周囲に直径0.2～0.3mの小穴が分布する。

その他、遺物包含層の第6a層からは橋文軒平瓦202が出土した(図26、図版10)。

3)近代(第5層上面)の遺構と遺物

第5層上面では、水琴窟・井戸・土壇などが検出され、おもに19世紀第3四半期以降の近代に降る遺物が出土した(図27～30、図版4～10)。なお、土製品類は図版8・9に写真のみを掲載した。

i)水琴窟(図28・29、図版5・6)

SX01 直径1.0m、深さ0.8mの円形の穴を掘り、底部を穿孔した口径約58cmの大谷焼甕205を逆さにして据えた水琴窟である(図版5)。



図30 第5層上面遺構出土瓦類

SX01(215・216)、SX02(217)、SK03(219)、SK05(220・221)、SK08(222～229)、SK11(230～236)、SK13(237)、SE09掘形(218)

203は肥前磁器の染付皿である(図29)。内面には楼閣山水文を施す。204は関西系磁器の染付鉢で、三田焼とみられる。底部にはカンナ削り痕が認められる。このほかに「細工人大□」の刻印をもつ鬼瓦215・216が掘形から出土した(図30)。以上は19世紀第2四半期～中葉のものであるが、他に本遺構からは明治時代初期に降る遺物が出土しており、遺構の時期はこの頃になるとみられる。

SX02 直径1.1m、深さ1.0mで、西側底部を0.2mほど高く掘り残したやや歪な截頭円錐形の掘形に、底部を割った胴部径約74cmの肥前陶器甕206を、西側底部に接地して直立させ、漆喰片を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂質細粒砂で埋めて固定する(図版6)。その陶器甕に突っ込むような形で、逆さにした口径約45cmの大谷焼甕207を甕206の内部に入れ、漆喰片で固定し、合わせ口になっている。甕内部にはにぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂が堆積していた。掘形埋土より磁器が出土した(図29)。

208・209は関西系磁器の蓋・碗のセットである。いずれも銅版転写技法によって文様を施す。碗209の高台内には「大日本京都柏山製」の銘がある。210は瀬戸美濃焼磁器の皿である。型紙摺によって文様を施す。また、211は丁銀を模した泥面子である(図版9)。この他に蛇の目文軒平瓦217が出土した(図30)。以上はいずれも掘形からの出土で、19世紀第4四半期以降のものである。

ii) 井戸

SE09 直径1.2mの円形掘形に、井戸瓦で組んだ直径0.7mの井戸側をもつ。掘形埋土から蛇の目文軒棧瓦218が出土した(図30)。

SE10 直径0.8m、深さ2.2m以上の掘形を、第3層上面から掘り込み、井戸瓦を用いた直径0.7mの井戸側を据えた井戸である。当地が精華尋常小学校の校地になってからのものである。

iii) 土壇

SK03 長径1.5m、短径1.2m、深さ0.4mの楕円形の土壇である。橘文軒棧瓦219のほか(図30)、泥面子の212が出土した(図版9)。212は家紋をモチーフとした泥面子である。

SK05 南北0.8m以上、東西2.0m、深さ0.3mの土壇である。十五弁菊丸瓦220と橘文軒棧瓦221が出土した(図30)。このほかに、播鉢のミニチュア土製品213、文字を記した泥面子214が出土した(図版8・9)。

SK06 南北1.5m、東西0.9m、深さ0.3mで、漆喰・細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトを埋土とする。

SK08 南北0.6m、東西0.3m以上、深さ0.4mの土壇である。左巻き三巴文軒丸瓦222・223、橘文軒棧瓦224、橘文鎌唐草225～229が出土した(図30)。

SK11 直径1.0m、深さ0.5mの瓦溜で、橘文軒棧瓦230～236が出土した(図30)。233は「利右□」、234は「喜十良」、235は「□^(長カ)□」の刻印を軒平部瓦当面にもつ。

SK13 南北約1.0m、東西1.5m、深さ0.3mの長方形の土壇で、橘文軒棧瓦237が出土した(図30)。

第Ⅳ章 遺構と遺物の検討

1) 瓦類の検討

第Ⅰ章で見たように1791(寛政3)年の難波新地付近図では、当地では見世物場などの施設は見えず、今回の出土遺物からも当地が19世紀以降の開発であることが裏付けられた。加えて1900(明治33)年に大阪市立精華尋常小学校の校地となって以降は、現在に至るまで現校舎の建設以外、開発や土地利用の変化を受けていないことから、土壌の遺物は19世紀の100年間に投棄されたといえることができる。瓦屋町遺跡[大文協2009b]では18世紀後半の軒瓦を中心に検討したが、19世紀の軒瓦の傾向に触れたい。

i) 刻印瓦

「喜十良」(234)、「利兵衛」(191)、「利右衛門」(192・233)などの堺瓦師の刻印と、「細工人大□」(215・216)の大坂瓦師の刻印、瓦師を限定できない「□ □」^(長カ)の刻印があった。堺瓦師の刻印は堺市内で発見されたものと同じである[嶋谷和彦1999・2003](註1)。「喜十良」は帯屋喜十郎、「利兵衛」は瓦屋利兵衛、「利右衛門」は丹治利右衛門の刻印である。

江戸時代の大坂三郷(大坂市中)では、御用瓦師寺島家が徳川家康との縁故から、幕府より代々世襲的な特権を認められていた。初期の頃は大阪城は言うに及ばず、京都の禁裏・院中、江戸城の瓦を扱い、下っても大坂三郷の瓦供給を独占し、町奉行の触書で他所瓦の大坂への侵入を防いでいた。1739(元文4)年から「(三郷)町中他国瓦商売致すまじく候」あるいは「寺島藤右衛門支配の瓦葺きどもに葺かせ申すべく候」という触書が、1741(寛保元)・1748(延享5)・1770(明和7)・1781(天明元)年に出されている[大阪市史編纂所1984]。しかし寛政年間(1789~1801年)の市中失火の際、町奉行は喫緊のこととして他所瓦を購入し、他所瓦葺を使役することを許した。これに対して失火後1ヶ年を経過した時点で、寺島家は他よりの競争で難渋すると申立て、幕府は1793(寛政5)年9月に、他所瓦の購入、他所瓦葺の使役を禁ずると共に、寺島家に値段の引下げを命じた。その後幕府は、1806(文化3)年7月寺島家への特権に根差すこの制限令、禁令を江戸表よりの下知として廃止した。その理由は口碑によると、寺島家が古道具屋の買取れる古瓦の使用にまで干渉を加えたので、古道具屋仲間が連合

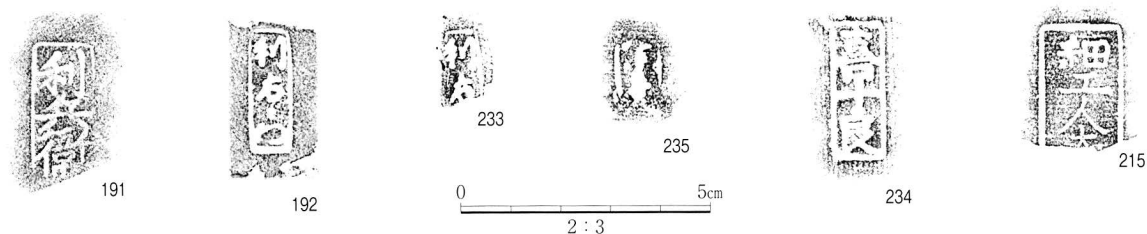


図31 瓦の刻印拓影

表1 軒瓦一覧表

番号	瓦の種類	遺構名	軒平瓦部唐草類型	軒丸瓦部瓦当直径	軒丸瓦部珠文数	備考
20	三巴文軒丸瓦	SX201	-	13.5	15	
21	橘文鎌唐草	SX201	I a a iv	-	-	
22	橘文軒平瓦	SX201	I b β iv	-	-	
23	橘文鎌唐草	SX201	a a ii	-	-	
24	三巴文軒丸瓦	SK210	-	13.9	16	
25	三巴文軒丸瓦	SK210	-	13.3	15	
26	橘文鎌唐草	SK210	I a a iii	-	-	
27	橘文鎌唐草	SK210	I a a ii	-	-	同じ遺構から他に同范瓦1個体出土。
28	橘文鎌唐草	SK210	a	-	-	
29	橘文鎌唐草	SK210	II a a ii	-	-	
30	橘文鎌唐草	SK210	I c a ii	-	-	
31	蛇の目文軒棧瓦	SK210	-	9	-	
32	蛇の目文軒棧瓦	SK210	-	×	-	
33	無文一文字瓦	SK210	-	-	-	
34	橘文軒棧瓦	SK213	a ii	×	×	
187	橘文軒平瓦	SK102	II c a iii	-	-	
188	橘文軒平瓦	SK105	a ii	-	-	
189	橘文鎌唐草	SK105	a a ii	-	-	
190	橘文鎌唐草	SK105	I a a iv	-	-	
191	橘文軒棧瓦	SK105	a iv	×	×	刻印「利兵衛」
192	橘文軒棧瓦	SK105	a a ii	×	×	刻印「利右衛門」
193	橘文軒棧瓦	SK115	×	9.1	13	
194	橘文鎌唐草	SK115	I c a iv	-	-	
195	橘文軒棧瓦	SK118	a	8.7	13	
196	三巴文軒丸瓦	SK123	-	13	16	
197	橘文軒棧瓦	SK123	×	9	13	
198	橘文鎌唐草	SK130	II c β ii	-	-	
199	三巴文軒丸瓦	SK132	-	14.4	11	
200	橘文軒平瓦	SK132	a	-	-	
201	橘文鎌唐草	SK133	a ii	-	-	
202	橘文軒平瓦	第6a層	I b a ii	-	-	
215	鬼瓦	SX01	-	-	-	刻印「細工人大」
216	鬼瓦	SX01	-	-	-	刻印「細工」
217	蛇の目文軒平瓦	SX02	-	-	-	
218	蛇の目文軒棧瓦	SE09掘形	-	11	-	
219	橘文軒棧瓦	SK03	II a a iv	9.4	12	
220	十五弁菊丸瓦	SK05	-	6.9	-	
221	橘文軒棧瓦	SK05	a iii	9.1	13	同じ遺構から他に同范瓦1個体出土。
222	三巴文軒丸瓦	SK08	-	13.5	15	
223	三巴文軒丸瓦	SK08	-	13.4	16	同じ遺構から他に同范瓦1個体出土。
224	橘文軒棧瓦	SK08	a	8.8	13	同じ遺構から他に同范瓦1個体出土。
225	橘文鎌唐草	SK08	I a a ii	-	-	
226	橘文鎌棧瓦	SK08	a a ii	×	×	
227	橘文鎌唐草	SK08	II a a iii	-	-	
228	橘文鎌唐草	SK08	a iv	-	-	
229	橘文鎌唐草	SK08	I a a iv	-	-	同じ遺構から他に同范瓦3個体出土。
230	橘文軒棧瓦	SK11	I a a ii	×	×	
231	橘文軒棧瓦	SK11	a a iv	-	-	
232	橘文軒棧瓦	SK11	a ii	9.4	13	
233	橘文軒棧瓦	SK11	×	8.9	12	刻印「利右」
234	橘文軒棧瓦	SK11	a ii	×	×	刻印「喜十良」
235	橘文軒棧瓦	SK11	a a ii	×	×	刻印「□□」他に同范瓦1個体出土。
236	橘文軒棧瓦	SK11	a ii	8.4	12	同じ遺構から他に同范瓦1個体出土。
237	橘文軒棧瓦	SK13	a ii	9	13	

してその不法を訴え、特権の剥奪に至ったらしい[宮本又次1958]。門閥的町人の終焉で、寺島家歴代は4代以降、1860(万延元)年に没する10代まで「藤右衛門」を名乗っていたのに、1867(慶応3)年に没する11代は「三八」で、19世紀中葉以降の凋落ぶりは目を覆わんばかりであったようである。すなわち、19世紀初頭から、大坂三郷においても自由競争となったのである。堺瓦師の刻印瓦はそれをよく示している。

ii) 軒平部の文様

大坂を中心に多用される橘文は、瓦屋町遺跡の文様の検討から「18世紀後半を中心に橘実が柿形となって定型化していく」[大文協2009b]としたが、今回の19世紀の土壌などの出土品にみられる橘文は、橘実だけでもさまざまなヴァリエーションがある。21・26は熟した柿形だが、22・187はチューリップの花の側面観に近く、27は中央が肥厚して鱗状鱗茎になった球根を思わせる。また198は半球状である。これは生産地の違いに由来するのであろう。

萼はb類のY字形が減り、a類のL字形か、L字形のなで肩状(c類)のものが圧倒的に多くなる。橘茎は一点珠だけで表すもの(Ⅱ類)もあるが、凸線+一点珠(I類)がやはり多い。子葉はトゲ状のa類が圧倒する。唐草と子葉の分岐はii類がiii・iv類を圧倒するが、子葉の枝の長さで判断すると長いii・iv類が、短いiii類を寄せ付けない。またi・v類は姿を見せない。

iii) 軒瓦の種類

本瓦葺きを志向した軒丸・軒平瓦が各遺構からまんべんなく出土しているが、全体を見ると軒棧瓦・鎌唐草が圧倒的多数を占める。瓦屋町遺跡で18世紀後半に一文字瓦が出現していることに触れたが、今回はSK210から出土している。重厚な本瓦葺き屋根よりも軽快な屋根が好まれていたようだ。

今回、軒平部文様区が中心飾の左右で、厚さが非対称であるものを軒平瓦ではなく、軒棧瓦か鎌唐草として扱った。また左軒棧瓦・左鎌唐草(大棟から見た棧位置の呼称である。軒下から見上げた際は逆になる)の存在の可能性は排除して考えたが、存在した可能性は残る。また軒平部の右半しか残存していない場合、34・191・192・231・234・235のように瓦当面右側区縁が面取りされているものは全て軒棧瓦とし、他は鎌唐草とした。これは右側区と重なる右隣の軒丸部とのスリアワセからの必

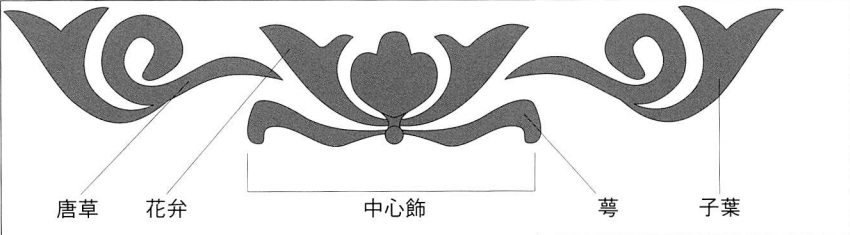


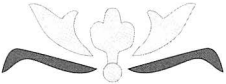
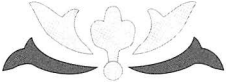
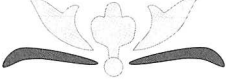







			子葉の分類(2)	
橘実・茎の分類	萼の分類	子葉の分類(1)		
 ← 連続する I 類  ← 離れる II 類	 a 類: 萼がL字状  b 類: 萼がY字状  c 類: 萼が曲線状	 α 類 子葉がトゲ状に分岐  β 類 子葉がY字状	 i  ii  iii  iv  v	

図32 軒平部の橘文様分類

要条件で、鎌唐草では面取りが不必要であるからである。

その上で今回の総点数を検討すると、軒棧瓦が24点、鎌唐草が19点で、軒丸部をもつものがやや多いという結論に達した。

註)

(1)堺市文化財課 嶋谷和彦氏に拓影を提示し、確認していただいた。

2)難波1丁目所在遺跡B地点(NB10-2次)調査出土の貝類

ここでは難波1丁目所在遺跡B地点(NB10-2次)調査で出土した貝類について報告する。同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954]を利用しており、個体数に関しては腹足綱が殻口数を、二枚貝綱は左右殻頂数の多数の方を採用している。そのほかシジミ類についてはマシジミとヤマトシジミが含まれているとみられるが、厳密な同定が困難であるため、一括して個体数を掲載している。

i)資料の概要

本調査では19世紀代を中心とする遺構や包含層から28種、742個体の貝類が出土した(表2・3)。

ii)貝類が出土した主要な遺構

貝類が出土した遺構は20基にのぼるが、計742個体のうちSK123・125・127に属するものが計654個体と88%を占めることから、以下ではそれら3つの遺構の資料を中心に報告する。

SK123 19世紀第2四半期～幕末の遺物を伴う土壌である。出土した497個体のうち、ハマグリが254個体(51.1%)を占め、マシジミを含むシジミ類が159個体(32.0%)、アカガイが35個体(7.0%)、バイが14個体(2.8%)と続いている。ハマグリの殻高計測値(計測数63個体)は19.0～68.3mmに分布しており、平均は32.3mmである。また、バイ独楽7点、イタヤガイ製貝杓子3点など、本調査で出土した貝製品の大半が本遺構から出土している。

SK125 19世紀第2四半期～幕末の遺物を伴う土壌である。出土した109個体のうち、アカガイが

表2 出土貝類種名一覧

【腹足綱 Gastropoda】		【二枚貝綱 Bivalvia】	
メカイアワビ	<i>Notohaliotis sieboldi</i> (Reeve)	サルボウ	<i>Anadara (Scapharca) subcrenata</i> (Lischke)
マダカアワビ	<i>Notohaliotis gigantea</i> (Gmelin)	アカガイ	<i>Anadara (Scapharca) broughtonii</i> (Schrenck)
クロアワビ	<i>Notohaliotis discus</i> (Reeve)	タイラギ	<i>Atrina (Servatrina) pectinata</i> (Linnaeus)
キサゴ	<i>Umbonium (Suchium) costatum</i> (Kiener)	イタヤガイ	<i>Pecten (Notovola) albicans</i> (Schroeter)
イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> (Lamarck)	ホタテガイ	<i>Patinopecten yessoensis</i> (Jay)
サザエ	<i>Turbo (Batillus) cornutus</i> Solander	イタヤガイ科	Pectinidae gen. et sp. indet.
レイシ	<i>Thais bronni</i> (Dunker)	チリボタン	<i>Spondylus cruentus</i> Lischke
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i> (Crosse)	イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i> Lischke
テングニシ	<i>Pugilina (Hemifusus) ternatana</i> (Gmelin)	マガキ	<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg)
バイ	<i>Babyronia japonica</i> (Reeve)	キクザル	<i>Chama reflexa</i> Reeve
		ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roeding)
		チョウセンハマグリ	<i>Meretrix lamarckii</i> Deshayes
		カガミガイ	<i>Dosinia (Phacosoma) japonica</i> (Reeve)
		アサリ	<i>Tapes (Amygdala) japonica</i> (Deshayes)
		トリガイ	<i>Fulvia mutica</i> (Reeve)
		シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i> Reeve
		マシジミ	<i>Corbicula (corbiculina) leana</i> Prime
		ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> Prime
		イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (v. Martens)

42個体(38.5%)を占め、バイが32個体(29.4%)、ハマグリが12個体(11.0%)と続いている。また、イタヤガイ製貝杓子2点が出土している。

SK127 19世紀中葉～幕末の遺物を伴う土壌である。出土した48個体のうち、ハマグリが26個体(54.2%)を占め、シジミ類が159個体(31.2%)、アカガイが3個体(6.3%)と続いており、SK123と共通した構成を示している。

iii) 貝種構成の特徴と貝製品

資料全体の貝種構成を見ると、鹹水性種のハマグリが42.9%、汽水・淡水性種のシジミ類が24.4%を占めている。大坂城・城下町跡とその周辺の遺跡における徳川期以降の貝種構成の時期的変化については、17世紀代に8～9割程度を占めていたハマグリが18世紀代には低下し始め、幕末から近代にかけては1割程度となる一方で、シジミ類・カワニナなど汽水・淡水性種の占める比率が上昇し、種数も増加することが既存の資料の分析から知られている[池田研2005・2010]。本資料はハマグリが低下し、汽水・淡水性種のシジミ類の比率が上昇していく過程の構成を示す資料と評価することができよう。また、より微視的に当地域における同時期の資料と比較すると、アカガイ(12.3%)とバイ(7.4%)が高い比率を示しているが、これはSK123やSK127など他の遺構の資料と異なり、当該2種が高い比率を占めているSK125出土資料が大きく影響を与えている。また、チリボタン・キクザル・レイシなどの稀少種を含んでいる点なども、本資料の特徴として挙げることができる。

表3 出土貝類一覧表

遺構名	サルボウ	アカガイ	タイラギ	イタヤガイ	ホタテ	イタヤガイ科	チリボタン	イタボガキ	マガキ	キクザル	ハマグリ	ハマグリ	カガミガイ	チョウセン	アサリ	シオフキ	トリガイ	シジミ類	イシガイ	メカイアワビ	マダカアワビ	クロアワビ	アワビ類	キサゴ	イボキサゴ	サザエ	レイシ	アカニシ	テンゲニシ	バイ
SX01		●									1										1	2					1			
SX02																				1										
SK03		2							1		2												●			1(棘)			1	
SK04		1																												
SK05											2												●							
SK06											●																			
SK07											1															1				
SE09																											2			
SK101																				1									1	
SK103																													1	
SK105		1						1?		1			●							1	4						2		3	
SK123	1	35(合1)	1	3 ⁽¹⁾			1	4	1	254	1	●	1	1	●	159	1	2	1	2	1	7	1			殻2蓋2	1	2	4	14 ⁽³⁾
SK124		1								3										3	1	2								
SK125		42		2 ⁽¹⁾				1	1		12				1		4			4	1	5				2		1	1	32
SK127		3			1		1				26					1	15													1
SK128																														1
SK132										1								1		1	3									
SK133		4			1 ⁽²⁾					2								1			1					1				1
SK211		1							1		2							1		1										
SK213		●									5											●								
包含層他		1									6												●	4	1			1		

註

1) SK123は左殻2、右殻3個体で、SK125は右殻2個体。これらのうち右殻はすべて杓子として加工されている。

2) 右殻で貝鍋として加工されている。

3) 7個体は独楽として加工されている。

4) ヤマトシジミとマシジミからなる。

5) (棘)は有棘型の個体数。

6) (合)は左右殻が合わさった状態で出土した個体数。

7) おおよその時期区分：0番台の遺構(近代)、100番台の遺構(19世紀第2～第3四半期)、200番台の遺構(19世紀前～中葉)

次に、加工痕のある貝類については、前述のとおりイタヤガイの右殻を用いた杓子がSK123から3点、SK125から2点出土している。ホタテガイの右殻を用いた鍋については、SK133から1点が出土しており、佐賀藩蔵屋敷跡(SH10-1次)調査で類例が確認されている[池田2012]。また、バイ独楽についてはSK123出土から7点が出土しており、SK127出土のバイ1個体も独楽の可能性もある。大阪市内の諸遺跡で出土しているバイゴマは本調査の資料と同様に19世紀代に属するものが多く[池田2011]、7点という出土数は敷津遺跡(SX11-1次)調査に次ぐものである[大文研2011]。このほか、アカニシ・テングニシ・バイなどでは、調理痕[池田2006]と考えられる孔や挟りが殻口や体層部に観察された。

第V章 まとめ

本書は、2010年に大阪市中央区難波三丁目で行った、難波1丁目所在遺跡B地点発掘調査の成果について報告した。

今回の調査では第7層の砂層から摩滅した土師器片が出土したに留まり、古代～中世の遺構・遺物は見つからなかったが、江戸時代後半の遺構・遺物を多く検出することができた。なかでも出土遺物は19世紀前葉～幕末および近代初頭を中心に、中国産磁器をはじめ、国産陶磁器・土器類、土製品や瓦類など多岐にわたっており、当地の繁栄を物語っている。

当地の開発は古地図などから、幕末以降と考えられてきたが、検出された土壙や穴蔵は、それをやや遡るものであることを裏付けた。

また、当地は江戸時代大坂の最大の墓地であった千日墓所の西近隣地であり、19世紀以降、見世物場としてにぎわう「溝の側(みぞのかわ)」以南の難波新地に位置し、1868(慶応4)年正月の大火に伴うと考えられる焼土層も一部で検出した。

1900(明治33)年以降は精華小学校の校地になるため、一部を除いて今回報告の遺構・遺物はそれ以前のものであり、ほぼ19世紀の100年間に限定されると考えられる。

今後さらに調査の範囲を拡げ、古代～近世の当地を語る資料を探ってゆかねばならない。

引用・参考文献

- 池田研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』、pp.859－886
- 2006、「大坂城跡(03－1・OKS99)出土の貝類」：大阪府文化財センター編『大坂城址』Ⅲ、pp.543－552
- 2010、「堂島蔵屋敷B地点(DJ08－2次)調査出土の貝類について」：大阪市文化財協会編『堂島蔵屋敷跡』Ⅲ、pp.78－86
- 2011、「大坂城下町とその周辺から出土したパイゴマ(独楽)について」：大阪歴史博物館編『大阪歴史博物館研究紀要』第9号、pp.1－17
- 2012、「貝類」：大阪文化財研究所編『佐賀藩蔵屋敷跡発掘調査報告』、pp.148－152
- 伊藤 毅1987、『近世大坂成立史論』生活史研究所
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「難波1丁目所在遺跡発掘調査(NA05－1)報告書」：『平成17年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.27－32
- 大阪市史編纂所1980、『近來年代記』上・下
- 1984、『御用瓦師寺島家文書』
- 大阪市文化財協会1998、「住友銅吹所跡の古環境変遷」『住友銅吹所跡発掘調査報告書』pp.378－392
- 2003a、第I章第2節「試掘立会調査の結果 2) NK02－1」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』、p.4
- 2003b、第I章第2節「試掘立会調査の結果 1) FD02－1」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－2001・2002年度－』、p.3
- 2004、「株式会社ヤマダ電機による建設工事に伴う船出遺跡(FD04－1)発掘調査報告書」
- 2005、「船出遺跡(FD05－1)発掘調査報告書」
- 2009a、「道頓堀二丁目における建設工事に伴う難波1丁目所在遺跡発掘調査(NB09－1)報告書」
- 2009b、『瓦屋町遺跡発掘調査報告』
- 大阪市立精華小学校1995、『122年のあゆみ 閉校記念誌』
- 大阪文化財研究所2010、「中央区難波三丁目(もと精華小学校等)における埋蔵文化財試掘調査(NB10－1)報告書」
- 2011、『浪速区敷津東二丁目における建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(SX11－1次)報告書』
- 岡本良一・内田九州男1976、『道頓堀非人関係文書』清文堂史料叢書第9刊
- 小山正忠・竹原秀雄1970、『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 嶋谷和彦1993、「堺・大坂出土の刻印瓦－堺瓦を中心に－」：『大阪府下埋蔵文化財研究会(第27回)資料』、pp.27－40
- 1999、「近世・堺の瓦屋仲間と刻印瓦」：『研究紀要』第2号、大阪市文化財協会、pp.119－127
- 2003、「堺瓦の生産と流通」：『関西近世考古学研究』XI、関西近世考古学研究会、pp.108－118
- 白神典之1995、「和泉国大鳥郡における近世から近代の瓦生産についての一報告」：『王朝の考古学』、大川清博士古稀記念会、pp.764－774
- 高橋好劇1925、「溝の側の見世物」：[田中豊・藤田実1992 pp.57－58]所収
- 田中豊・藤田実1992、「難波新地見世物場の位置について」：『大阪の歴史』第36号、大阪市史編纂所、pp.45－59
- 文化庁文化財部記念物課編2010、『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』
- 平凡社地方資料センター1986、『大阪府の地名(日本歴史地名大系28)』平凡社
- 宮本又次1958、「寺島藤右衛門と山村与助」：『大阪商人』アテネ新書、弘文堂、pp.178－184
- 吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社

**The Excavation Report
of the
Location B of the Namba 1-chome Site
in Osaka, Japan**

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

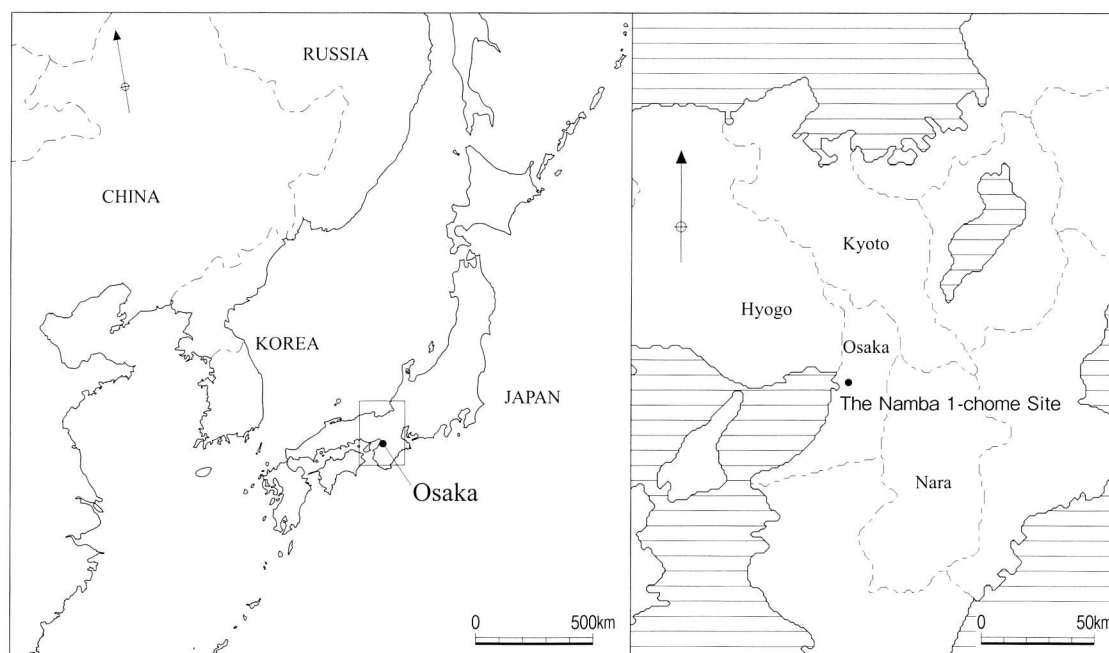
SD: Ditch

SE: Well

SK: Pit

SP : Small pit or Posthole

SX: Other feartures



CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Previous Research and Site Environment	1
1) Previous Research	1
2) Site Environment	2
Chapter II Background and Progress of Research	7
1) Background of Research.....	7
2) Progress of Research	7
Chapter III Investigation Results	9
S.1 Stratigraphy	9
S.2 Features and Artifacts	11
1) Features and Artifacts of the Late Edo period (Upper surface of Bed 7)	11
2) Features and Artifacts of the end of the Edo period (Upper surface of Bed 6a · 6b).....	15
3) Features and Artifacts of the Modern period (Upper surface of Bed 5)	30
Chapter IV Examination of Features and Artifacts.....	33
1) Examination of Features and Artifacts	33
2) Examination of the Shell Remains	36
Chapter V Conclusion	39
References and Bibliography	40

English Contents

報 告 書 抄 録

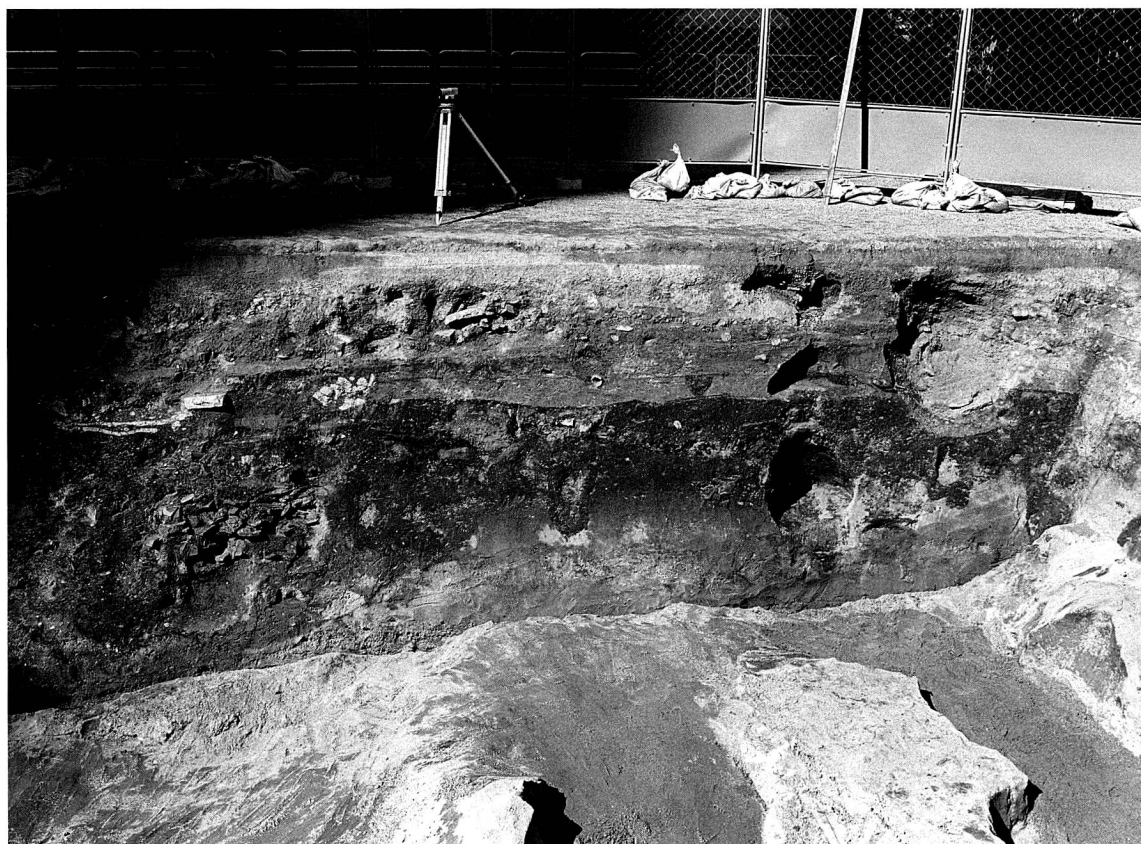
ふりがな		なんば1ちょうめしよざいいせきBちてんはくつちようさほうこく						
書名		難波1丁目所在遺跡B地点発掘調査報告						
編著者名		黒田慶一・小田木富慈美・池田 研						
編集機関		財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所						
所在地		〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833						
発行年月日		西暦 2012年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なんば ちょうめ 難波1丁目 しよざいいせき ちてん 所在遺跡B地点	おおさかしちゆうおうく 大阪市中央区 なんば ちょうめ 難波3丁目25番	27128	-	34° 39′ 45″	135° 30′ 17″	20100914～ 20101016	140㎡	遺跡内容の 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
難波1丁目所 在遺跡B地点	集落	江戸時代		土壇・井戸・溝・穴蔵・ 小穴		陶磁器・土器・土製品・石製品・瓦		
		近代		土壇・井戸・水琴窟・小 穴		陶磁器・土器・土製品・石製品・瓦		

本書は、2010年に大阪市中央区難波三丁目に所在する難波1丁目所在遺跡B地点において行った発掘調査の成果を報告するものである。

調査地は海浜の沿岸州上に立地するが、19世紀前葉～幕末および近代初頭の難波新地関係の遺構が検出された。調査地の北数十mには、「溝の側(みぞのかわ)」の跡地があり、その南方は古地図などから幕末の開発と考えられてきたが、それより若干遡ることを裏付けた。

1900(明治33)年以降は精華小学校の校地になるため、一部を除いて、今回報告の遺構・遺物はそれ以前のもので、ほぼ19世紀の100年間に限定される。

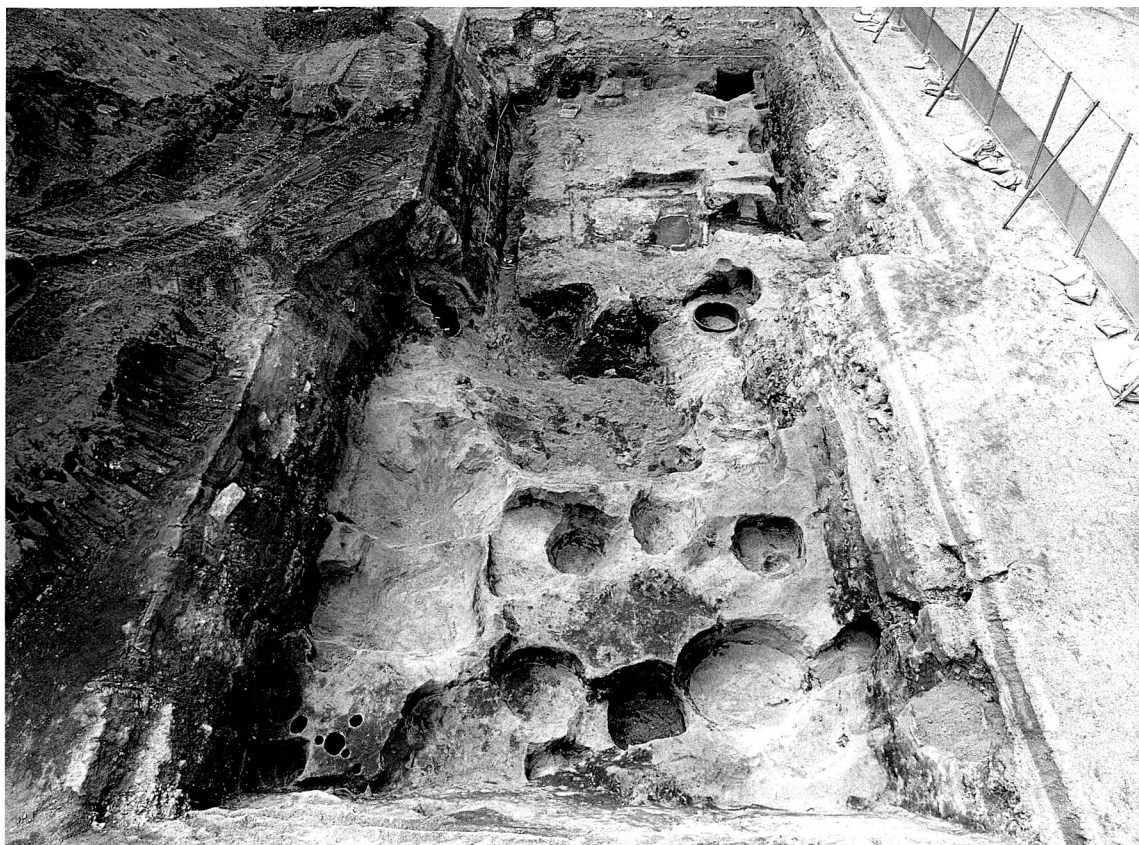
図 版



北壁地層断面東半部(南から)



西壁地層断面(東から)



第7層上面検出遺構全景(東から)



第7層上面検出遺構東半部(北から)



第7層上面検出遺構西半部(北から)



SX201(北から)



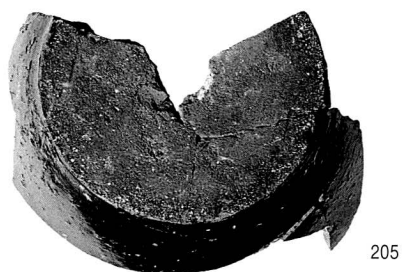
第6a・6b層上面
検出遺構全景(東から)



SK05(北東から)



第5層上面検出遺構東半部(北から)



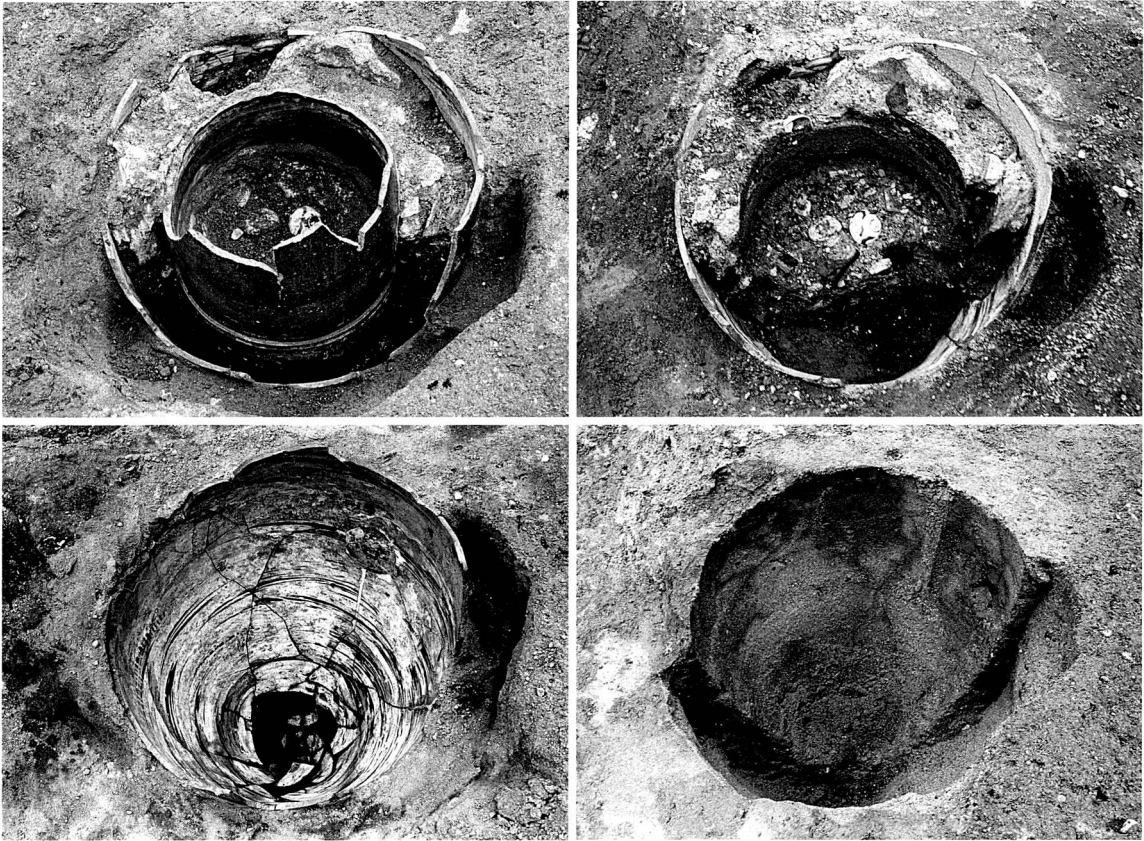
205



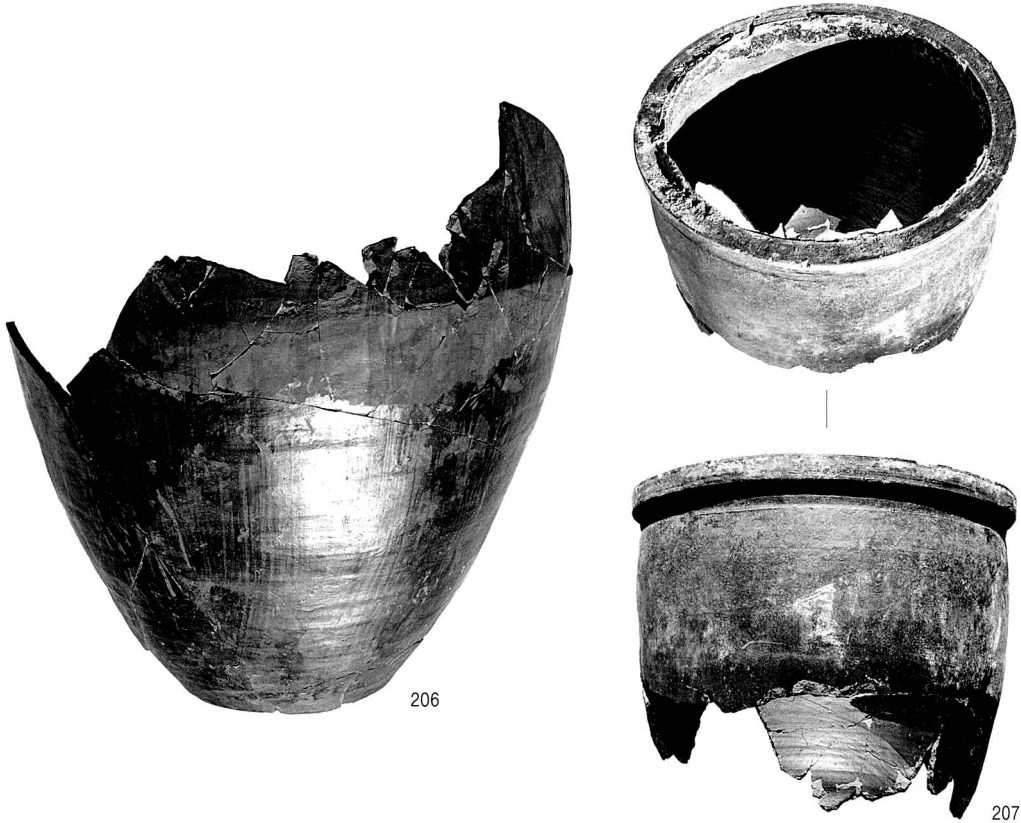
205



SX01検出状況および出土遺物



SX02検出状況および断面(北から)



SX02出土遺物



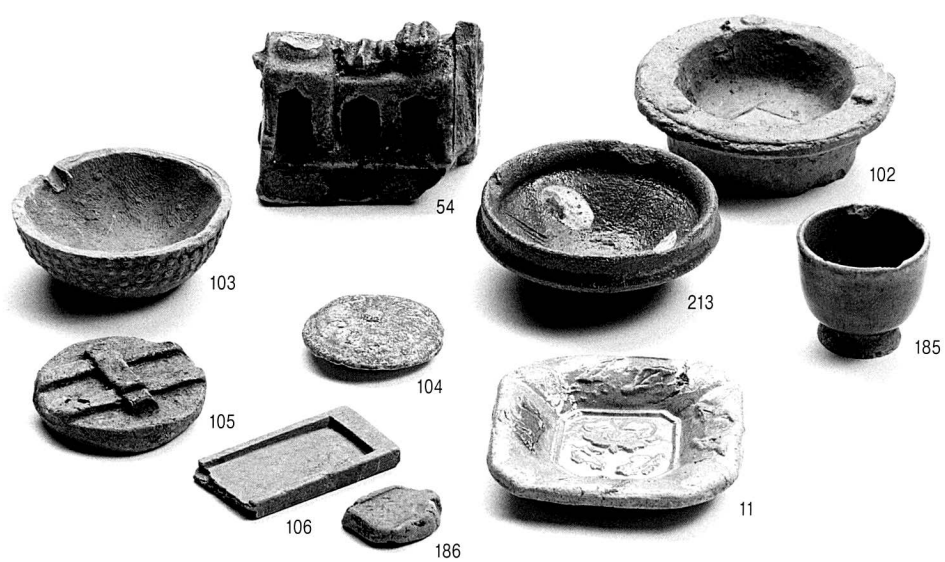
精華尋常小学校校舎の基礎西半部(北東から)



精華尋常小学校校舎の基礎西半部(南から)



SK210(19)、SK123(97~101)、SK124(160)、SK125(157)、SK127(168・169)



SX201(11)、SK105(54)、SK123(102~106)、SK133(185・186)、SK05(213)



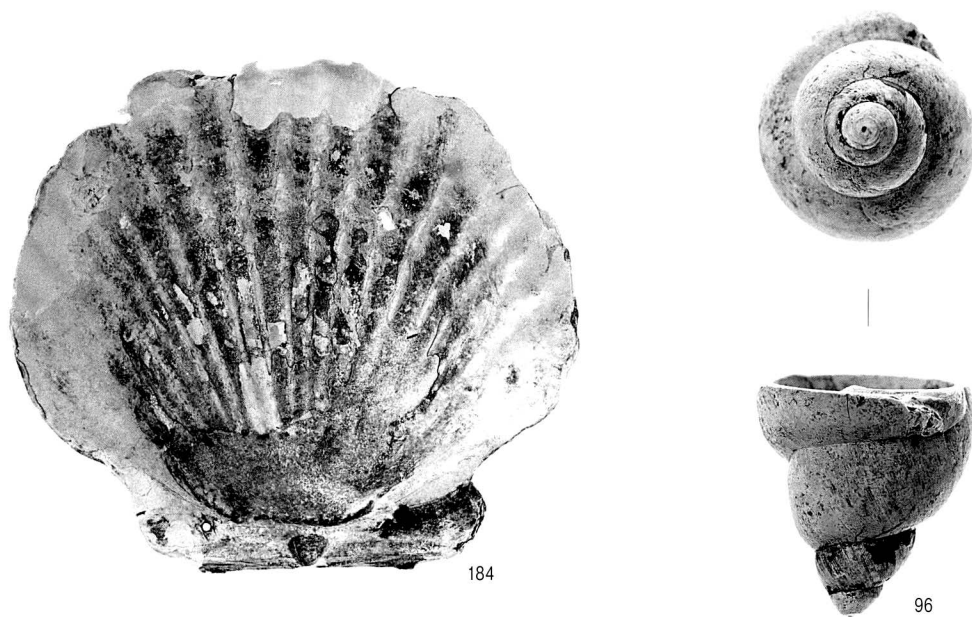
SK123(107~115)、SK125(158・159・161)、SK127(170~173)、SX02(211)



SK123(116~124)、SK03(212)、SK05(214)



SX201(21)、第6a層(202)、SX01(215、216)、SK05(221)、SK11(233)



SK123(96)、SK133(184)

大阪市中央区 難波 1 丁目所在遺跡B 地点発掘調査報告

ISBN 978-4-86305-074-7

2012年 3 月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1 - 1 - 35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町2-5-31

**The Excavation Report
of the
Location B of the Namba 1-chome Site
in Osaka, Japan**

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association